

大 分 市

多武尾遺跡

調査概報

1982

大分市教育委員会

序 文

多武尾遺跡の緊急発掘調査は、大分市立大東中学校の移転用地を発掘調査したものです。
用地はすでに周知されたところであり、試掘調査を実施し、その結果に基づいて東側部分は遺跡を保存するために盛土を行ない運動場とし、西側部分の校舎、体育館の建設用地部分を調査いたしました。

調査中、銅鐸屋外での小銅鐸が発見され、さらに溝の中にはおびただしい土器が出土しており、今後銅鐸の製作年代が解明されるのもそう遠いことでないように思います。

本書は今回の発掘調査結果の収録であります。広く活用されることを願うとともに、地元の方々はもちろん指導、助言をいただきました諸先生方をはじめ調査の意義と目的をよく理解され心から協力くださいました多くの方々に衷心より感謝申しあげる次第であります。

昭和 57 年 12 月 10 日

大分市教育委員会教育長 松 本 喜 義

例

言

1. 本書は、大東中学校新築移転に伴い、事前に実施した埋蔵文化財緊急調査の概報である。
2. 発掘調査は大分市教育委員会が、調査主体者となって昭和54年12月14日より、昭和55年7月10日までを第1次調査とし、昭和56年10月6日より同年10月26日までを第2次調査として調査を実施した。
3. 本書の執筆は、担当した松田が行い、小田富士雄先生（北九州市立博物館主幹）に小銅鐸に関する玉稿をいただいた。
4. 出土遺物の実測は、主として松田が行い、牧尾義則（大分県文化課主任）、瀧枝和夫（大分市社会教育課文化財係技師）の手をわずらわせた。写真については、杉崎重臣（現南大分中学校教諭）と松田が担当した。

本文目次

第1章 序 説	1	4 掘立柱建築物	13
1 調査の経過	1	SB-1	13
2 調査員の構成	1	5 出土遺物	14
第2章 遺跡の位置と環境	2	石器	14
第3章 遺跡の調査	5	土器片加工品	15
第1節 調査の概要	5	土製品	17
1 住居跡	5	6 小銅鐸を伴う遺構	18
SH-1	5	SD-6	18
SH-3	11	小銅鐸	22
2 土壌墓	12	SD-3	38
SK-1	12	SD-7	49
3 溝状遺構	12	第4章 まとめ	55
SD-1	12	多武尾小銅沢の系譜	58
SD-2	12		

図版目次

図版 1	多武尾遺跡と周辺の航空写真	63
図版 2	第1次調査区全景	64
図版 3	第2次調査区全景	65
図版 4	SH-1、SB-3.4.5、SK-1	66
図版 5	SD-6、SD-7	67
図版 6	SD-3出土土器	68
図版 7	SD-6出土土器	69
図版 8	SD-7出土土器	70
図版 9	小銅鐸、磨製石鏃、石苞丁	71
図版 10	高坏接合法、調整、布目、初痕	72

第2章 遺跡の位置と環境

多武尾遺跡は、大分市の中心部より東南約 7.5 km、大野川の河口より約 6.5 km上った大野川の支流である乙津川の西の鶴崎段丘上、大分県大分市大字横尾宇南域の辻に所在する。

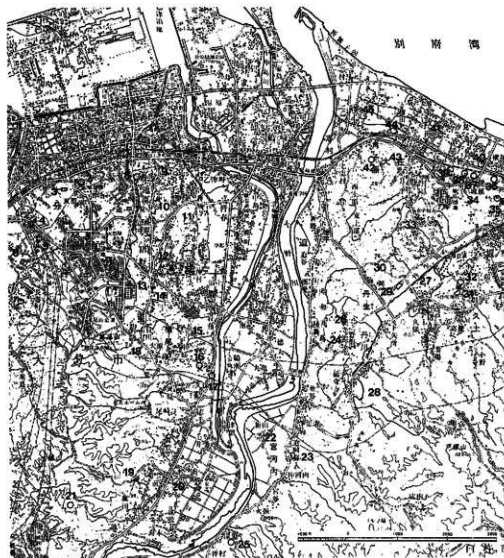
地形的には、標高 165 m の古城山を基部として南から北に延び別府湾を望む洪積台地の東端標高 40 m 前後の鶴崎段丘上に位置する。東は大野川の侵蝕により崖となって乙津川を望み、さらに沖積地を挟み約 1.7 km 離れて現在の大野川が北流している。その東側には丹生丘陵が海岸に延びており遺跡から一望できる。鶴崎段丘の西側は大分川の侵蝕により崖となり、大分平野を望む。

歴史的には、旧石器時代より人類の営みは始まる。多武尾遺跡では旧石器時代の生活跡は検出できなかったが、表層あるいは溝状遺構埋土中に削器、優器、石核などが散見でき、石材は無珎品流紋岩であった。大野川流域は旧石器時代の遺跡が県下で最も集中する所であり、特に中流域にある大野原台地は密集度が高い。下流域では丹生遺跡が存在し、条件を同じくする鶴崎段丘での発見は今後増加すると思える。

縄文時代の遺跡は、鶴崎段丘上においては明瞭でない。おそらく後世の土地開発等による削平で消滅したのであろう。段丘下では多武尾遺跡の南約 750 m の距離に横尾貝塚がある。それによれば、縄文時代の遺構は埋葬遺構、中期土壌、後期後葉の住居址状窪穴があり、土器は早期から後期に亘って検出されている。さらに多武尾遺跡の北西約 3.5 km の段丘下で後期の小池原貝塚があり、かつて鶴崎段丘上に縄文各時代の人類の営みがあった事を証明している。

弥生時代に至って、前期の遺跡は明らかでないが、明野団地造成時に土器、石器の散布が著しく、前期末から後期、土師式土器に至るまでの集落が存在したらしい。東岸の丹生台地では丹生、小原、一木、田尾、木田、平野の各地域で土器を採集しており、前期の集落を想定できる。中期は、米竹遺跡で下城タイプの甕形土器を採集している。後期に入ると遺跡数は爆発的に増加し、広範囲におよぶ。生活跡として米竹、北の崎、猪野、葛木、米良草、二目川の鶴崎段丘、岡、延命寺、丹川、城原、角子原の丹生地域が掲げられる。台地上は生活遺構が主流をなし、わずかに丹川に水田跡が認められる。埋葬遺構としては大在浜遺跡があり、弥生時代中期より古墳時代前期に渡って、埋葬遺構と供献された土器が多量に検出されている。しかし後期の埋葬遺構は検出されておらず、いざんとして高地、低地を問わず不明である。これは大野川流域を通じての現象であり、大分川流域に至っても守岡、雄城古、尼ヶ城、賀来中学校で成人用埋葬遺構は検出されておらず、大野川流域下と同じ現象をみる。

古墳時代では、生活遺構は検出されていない。この時代に低地域への集落の移動を想定できるが、守岡 19 号住居のように在地系土器と庄内系の土器が混在する時期には台地上に営んでおり、これは社会的な不安が残る時期と考えられ、移動はそれ以降と思われる。埋葬遺構につい



昭和53年修正国図 1:25,000 地形図
国土地理院

1 牧 遺 跡	2 高 城 山 宿 跡	3 松葉山横穴古墳群	4 北下郡横穴古墳群	5 穴井前横穴古墳群
6 羽 田 遺 跡	7 長谷横穴古墳群	8 小池原貝塚	9 米 竹 遺 跡	10 尾 崎 遺 跡
11 北の崎遺跡	12 猪 野 遺 跡	13 米良草遺跡	14 葛 木 遺 跡	15 多武尾遺跡
16 王子山古墳群	17 横 尾 古 墳	18 二目川遺跡	19 一ノ谷横穴古墳群	20 門 前 遺 跡
21 米が尾遺跡	22 新 田 遺 跡	23 阿蘇入横穴古墳群	24 野間古墳群	25 大内古墳群
26 丹生遺跡	27 丹川遺跡	28 延命寺遺跡	29 岡下横穴古墳群	30 岡 遺 跡
31 城下横穴古墳群	32 原 経 塚	33 越前原遺跡	34 城 原 遺 跡	35 亀 塚 古 墳
36 湯ノ尻古墳	37 大 蔵 古 墳	38 城原天満社墓古墳	39 竹下横穴古墳群	40 横 塚 古 墳
41 大在浜遺跡	42 王 越 古 墳	43 角子原遺跡	44 大 在 古 墳	45 下志村遺跡

第1図 多武尾遺跡と周辺の遺跡

第3章 遺跡の調査

第1節 調査の概要

多武尾遺跡は昭和54年度の試掘の結果、学校用地全域に渡る集落遺跡である事が判明し、さらに、表層等で地全体に渡って広がる事を明確にした。昭和54年度からの第1次調査は、校舎分約3000㎡、進入道路分約34㎡を対象として実施した。

精査の結果、弥生時代後期から室町時代後期に渡って遺構が検出された。遺構を時期別にみると、弥生時代後期（円形住居1軒、溝状遺構3本）、室町時代後期（溝状遺構2本）、近世（溝状遺構2本）、時期不明（方形竪穴遺構1基、土壌蓋3基、溝状遺構2本、竪柱建建築物6棟、土壌3基）、出土遺物は、土器、鉄器、磨製石斧、磨製石鏃、石鏃、ガラス小玉、土鏃、土器片加工品があり、特に小銅鐻の発見は注目される。

遺構を伴わない遺物は、溝埋土中に旧石器時代の石器、縄文時代後期（鐘ヶ崎式）、弥生時代中期（下城式壺）などの土器片を散見できる。古墳時代後期の須恵器片、平安時代後期の内黒陶は柱穴から検出された。表層では火縄銃の弾丸と思われる鉛玉があり、あるいはこの地域内が古戦場であったと思われる、本報告で明らかにした。

奈良時代の遺構、遺物はなく、断片的に人々の営みがあったと思われる。

第2次調査では体育館分約360㎡を昭和56年度に調査し、円形住居跡2軒、溝状遺構1本、竪柱建建築物1棟を検出した、住居跡の時期は明確でないが、土器片などからすれば後期終末に求められよう。

多武尾遺跡では、後世の耕地整理により削平され、数多くの遺構、遺物が消滅しており、時期、性格など明確にできなかった遺構もあり、整理上困難をきたした。

1. 住居跡

SH-1

E11区に間に位置する。東側は削平を受け明確な形態は把握できなかったが、短軸6.2m、長軸4.5m以上の隅隅形を呈すると思われる。柱穴は4本確認できたが、配置は明確につかめなかった。北側に巾1.4m、高さ4cmのベット状の高まりをみせるが、南側では段がつく程明確ではない。東端の長方形土壌は1.5×0.5m、深さ約20cmを測る。底部には灰が薄く堆積していた。

遺物は破片のみ散発的にみられる。1は菱形土器の口縁部、2は黒口縁壺の口縁部、3は短く外反する高杯の口縁部、4は平底で底部近くに爪の圧痕をみる。2次焼成をみないところから小形の蓋形土器かと思われる。5は土器片加工品で分類Aに属する。6は六角形の砥石で周囲6面と土面に研磨痕をみる。石材は乳白色を呈した軟質砂岩である。

でも鶴崎段丘上での存在は明らかでない。砂丘遺跡の大在浜遺跡には庄内式新段階から布留式に渡る時期の供養土器が多数検出され、その埋葬形態には壙棺、石棺があり、それぞれ時期を異にする現象がみられる。^(註14) 明野台地の北西端に高城石棺群が知られているが、時期等についての詳細は不明である。

鶴崎段丘に墳丘を有する古墳の存在は、現在まで知られていない。^(註15) 墳墓は段丘周囲の崖に横穴として構築されているのに対して、丹生川西岸に位置する丹生丘陵では、県下最大の前方後円墳である亀塚古墳が位置し、付近には大蔵古墳、城原天満社裏古墳が存在する。さらに大野川東岸の野間地区では、前方後円墳を含む10基の古墳群が存在し、これらの被葬者は海人系の集団にかかわる首長とみられている。

大野川下流域は海人系地域集団にかかわる地域であり、海上交通に重要な役割をなしていたことはいうまでもなく、瀬戸内海を媒体として畿内あるいは北九州、瀬戸内海沿岸の諸文化の影響は大であり、瀬戸内海から大野川を通じて県北西部にまでおよんでいたものと思える。下流域は、坂ノ市地区を含めて青銅器の発見例が集中する所であり、二目川（銅鈴1）、京ヶ尾（中広銅鈴5）、大在浜（中細銅鈴4）、久原（細形銅鈴1）、細（銅鈴1）、木田名辺山（広形銅鈴2、中広銅鈴3）、丹生清水遺（平形銅鈴1）^(註16) が掲げられ、特異な地域として注目される。

註1 大野町教育委員会「大野原の遺跡」 1980年

註2 財団法人古代学協会「大分県丹生遺跡第3次発掘調査概報」 昭和40年

註3 大分県教育委員会「横尾見里発掘調査概報」 1982年

註4 賀川光夫、橋本信「大分県文化財調査報告 第13輯」『小池原貝塚』 昭和42年

註5 賀川光夫「大分県の考古学」 昭和46年

註6 高木隆、佐藤昭、杉崎重臣「丹生川遺跡の考古学的考察」 昭和37年

註7 昭和57年度大分市教育委員会調査「鶴崎遺跡」では、下城タイプの菱形土器を伴う野間式を検出した（未報告）

註8 大分県教育委員会「大分県文化財調査報告 第48輯」『新遺跡』 1980年

註9 大分市教育委員会「守国遺跡」 1979年

註10 大分県教育委員会調査による。昭和46年～50年（未報告）

註11 大分市教育委員会調査による。昭和53年（未報告）

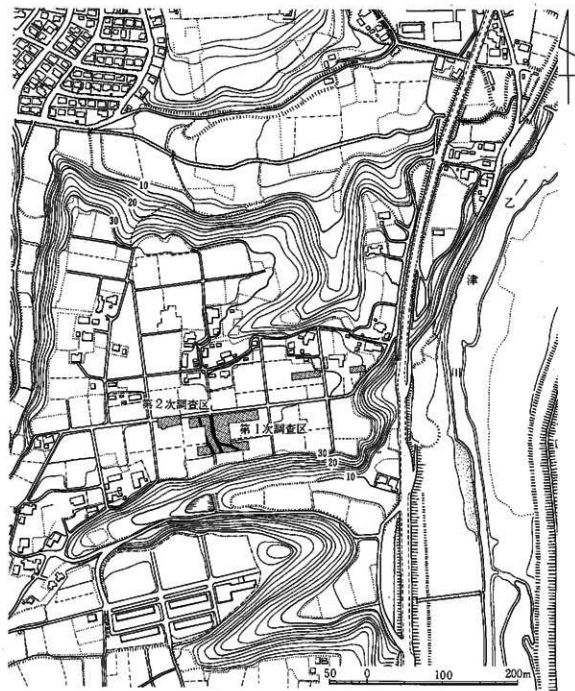
註12 大分市教育委員会調査による。昭和55年（未報告）

註13 昭和57年度大分市教育委員会調査中の「地蔵原遺跡」では布留併行期の多数の住居跡が認められるとの瀬尾徳児氏より報告を得た。

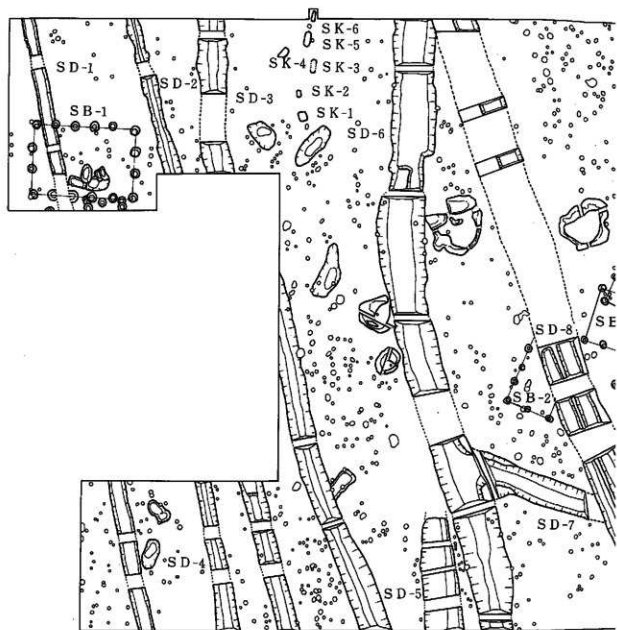
註14 註8に同じ

註15 高橋信氏より横尾貝塚の裏山に円墳と思われる古墳を2基確認したとの御教示を得た。

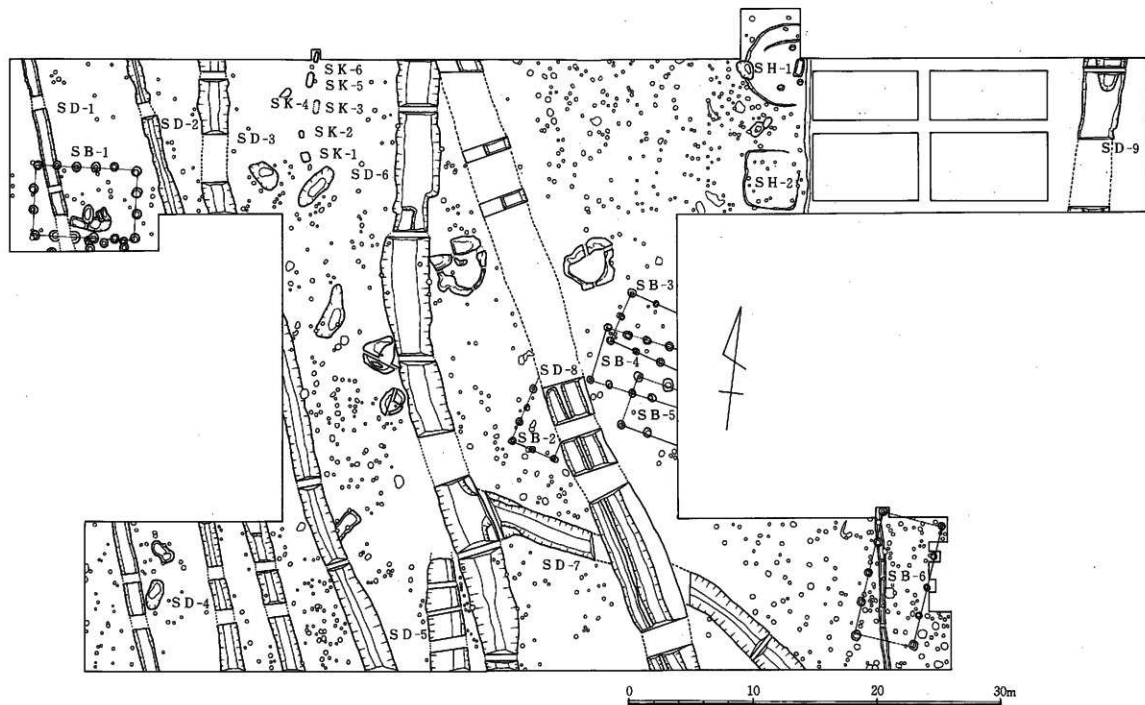
註16 九州歴史資料館「青銅の武庫」 1980年



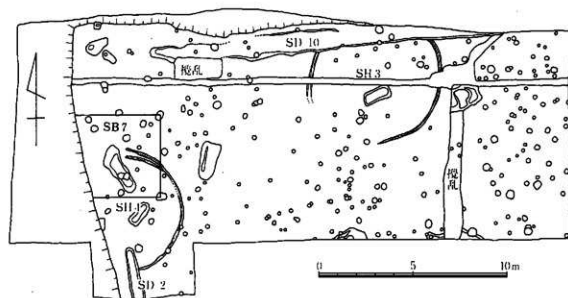
第2図 多武尾遺跡の地形



第3図 第1次調査区



第3図 第1次調査区実測図



第4図 第2次調査区実測図

第2次調査区は、第1次調査区の西側約10m離れた所に位置し、体育館分約360㎡を調査した。

調査の結果、前回と同様に遺構の遺存状態は悪い。住居跡2軒、掘立柱建築物1棟、溝状遺構1本を検出したが、わずかに平面プランを確認できたに等しい。

SD-10は調査区の北側に位置し、市約1.2m、深さ0.2mのU字形を呈している。東北東から西南西に走行し西側に行くに従って消える。遺物は須恵器小片を検出しているが、小片のため器形、時代的なものは判明していない。

SB-7は調査区の西側に位置し、SH-4を切っている。西側部分は削平のため不明であるが、長軸を東西方向にとり渠間2間(2.4m)を計る。桁間は不明である。

住居跡はSH-3・4共円形を呈するものと思われる。SH-1と異なり2軒共壁溝を周らせている。中央よりやや南東よりに長方形の土壌を有す点においてはSH-1と同様である。

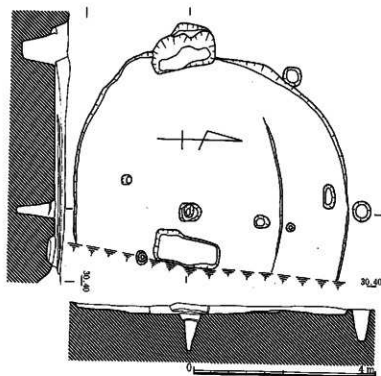
大分川流域の守岡遺跡^(註1)、賀来中学校遺跡^(註2)、尼ヶ城遺跡^(註3)、大野川下流域の尾崎遺跡^(註4)では弥生時代終末の住居跡に円・方形をとわず、長方形の土壌をみる事ができる。性格は明確でない。

註1 大分市教育委員会「守岡遺跡」 1979年

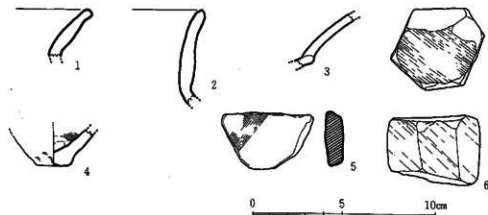
註2 大分市教育委員会調査による。昭和55年(未報告)

註3 大分市教育委員会調査による。昭和53年(未報告)

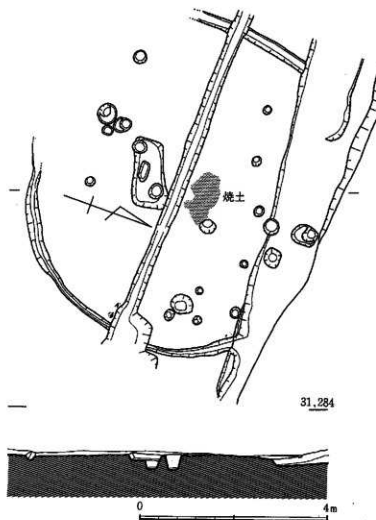
註4 大分市教育委員会調査による。昭和57年(未報告)



第5図 SH1実測図



第6図 SH1出土遺物実測図



第7図 SH3実測図

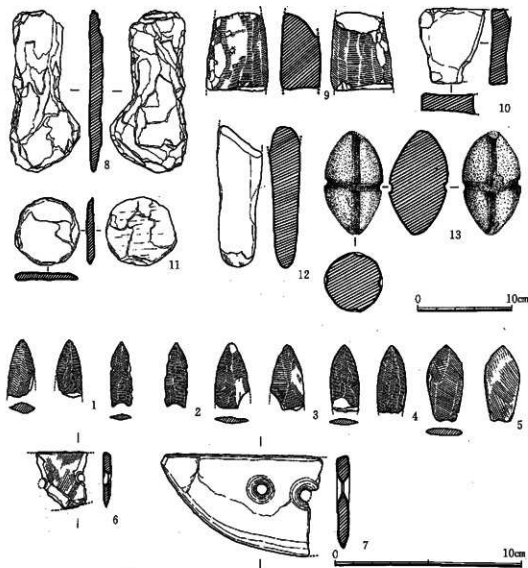
SH-3

SH-3は壁溝のみ遺存し、わずかに形態を知る事ができた。径は約7mの円形を呈する。柱の配置は北側をSD-10に切られ明確でない。炉跡は中央北側に位置し、掘り込みはみられず厚さ6cmの硬い焼土が堆積していた。炉跡の南側に1.2×0.5m、深さ16cmの長方形の土があり底部に薄く灰が堆積していた。遺物は散発的で、磨製石斧丁片、磨製石鏃を検出している。

5. 出土遺物

住居跡より検出した遺物は磨製石鏃1点、磨製石槍丁1点、砥石1点の計3点、土器類は破片の程度で、他は溝状遺構埋土中、表探によるものである。

石器



第11図 石器実測図

遺物No.	器種	出土遺構	現存長	現存幅	厚さ	石材	備考
1	磨製石鏃	SD-3	3.0	1.45	0.5	粘板岩	基部欠損
2	磨製石鏃	SD-6	3.4	1.2	0.3	粘板岩	凹基無蓋、柳葉形、側部部分欠損
3	磨製石鏃	SD-6	3.5	1.8	0.35	粘板岩	基部欠損
4	磨製石鏃	SD-6	3.6	1.1	0.3	蛇紋岩	基部欠損
5	磨製石鏃	SH-3	4.1	1.9	0.3	蛇紋岩	凹基無蓋、柳葉形
6	石槍丁	SH-3	3.1	3.1	0.5	粘板岩	両端部欠損、両面穿孔
7	石槍丁	SD-3	8.5	5.4	0.7	結晶片岩	端部欠損、半月形を呈す。両面穿孔
8	扁平状石片	H-8表	17.2	8.3	1.6	結晶片岩	形状を呈す。
9	磨製石斧	SD-6	8.2	6.5	4.3	蛇紋岩	両端部欠損、敲打により整形しのち研磨
10	砥石	SD-6	8.0	7.0	2.0	砂石	両面側部を使用
11	円盤状石製品	SD-6	7.1	7.8	1.0	結晶片岩	端部側部を研磨
12	敲打石	表探	14.8	4.7	1.7	片岩	下部に敲打及び磨減痕上部欠損
13	石錘	SD-3	11.0	6.2	6.2	安山岩	全体に敲打のち研磨切目は研磨となる。

表1 石器観察表

※単位cm

土器片加工品

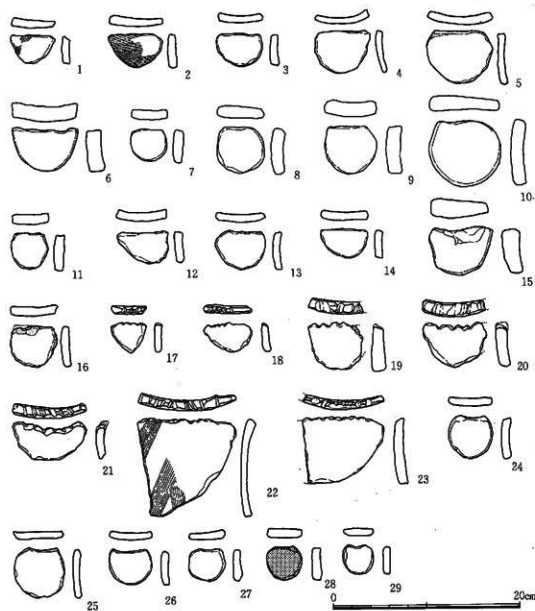
土器片加工品（メンコ状土製品）は、大野川中流域に集中して出土し、上流域でも少量ながらみられ、さらに大分川流域においても少量の出土をみるに至っている。

多武尾遺跡は大野川の下流にあたり、今回の出土により大野川全流域に渡っている事が判明し、土器片加工品が河川を通じての集落に限定できる事が濃厚になってきた。

用途について、これまで形を整えるための研磨か、あるいは使用による磨減が限定できなかったが、多武尾遺跡ではH類中1点、赤色顔料を塗ったものが検出された。これは土器片加工品の最終段階のものともみられ、製品の1形態を知る事ができた。

分類	形状	形状の特徴	SH	4B	4D	4E	4F	4G	4H
A	半月形	全周が研磨(磨減)され半月形を呈する。	1	0	1	6	1	1	
A1	半月形	A類と同形であるが一部の研磨(磨減)が見られない。一部の加工品	0	1	1	2	1	0	
A2	半月形	A類と同形であるが一部の研磨(磨減)が見られない。一部の加工品	0	0	0	1	0	0	
B	半月形	A類に近いが半月片方が多い。一部の加工品	0	0	0	0	0	0	
C	半月形	断面はA類であるが一部の研磨(磨減)が見えない。一部の加工品	0	0	0	0	0	0	
D	半月形	A類の断面の形状に大小のサイズを有する。	0	0	4	3	1	0	
E	半月形	A類を単純化した形状のものや両利用の可能性がある。	0	0	0	0	0	0	
F	半月形	不定形であるが、方形及び三角形に近い形状	0	0	6	0	0	0	
G	半月形	多角を呈し円形に近い形状	0	0	3	6	0	0	
H	半月形	A類に近いが、断面を呈する。全周研磨(磨減)	0	0	2	4	0	0	

表2 土器片加工品分類表 註2

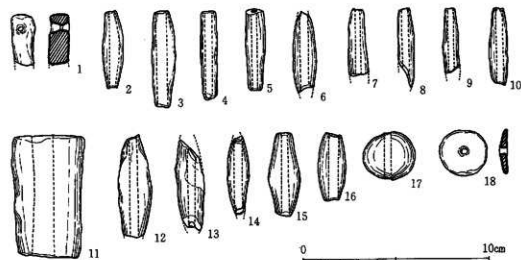


第12図 土器片加工品(メンコ)実測図

註1 大分市教育委員会調査の尼ヶ城、箕栗中学校遺跡の筒状遺構から少量検出している。

註2 土器片加工品の分類は大分市教育委員会「大野原の遺跡」1980を引用した。

土製品



第13図 土製品(土鍾)実測図

遺物No.	出土遺構	現存長	現存幅	形 態	遺物No.	出土遺構	現存長	現存幅	形 態
1	SD-2	2.8+α	1.2	有孔棒状土鍾形	10	SD-5	4	1.0	管状半紡錘形
2	SD-2	4.1	1.1	管状半紡錘形	11	SD-6	6.5	3.8	管状筒形
3	表 探	5.1	1.3	管状半紡錘形	12	SD-9	5.4	1.8	管状紡錘形
4	表 探	4.7	0.9	管状筒形	13	SD-9	4.8+α	1.0	管状紡錘形
5	表 探	4.3	1.1	管状筒形	14	SD-9	4.1+α	1.2	管状紡錘形
6	表 探	4.3+α	1.3	管状紡錘形	15	SD-9	4.4	1.7	管状紡錘形
7	表 探	3.5+α	1.1	管状紡錘形	16	SD-9	3.7	1.5	管状紡錘形
8	SD-6	4.2+α	0.9	管状筒形	17	SD-6	2.6	2.8	球状形
9	表 探	3.5+α	0.8	管状半紡錘形	18	SD-6	2.4	0.4(厚み)	紡錘車

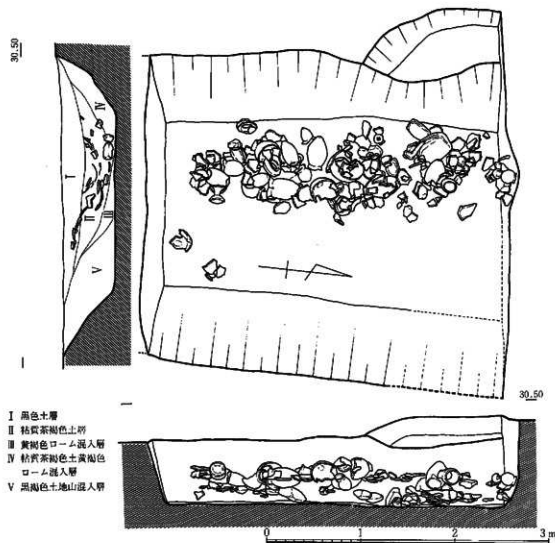
表3 土製品(土鍾)観察表

単位:cm

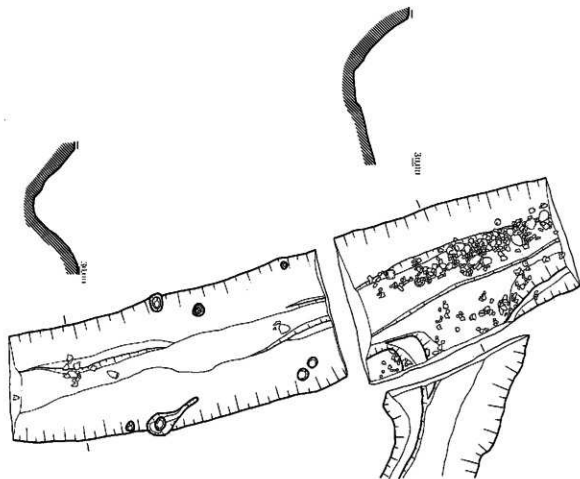
6. 小銅鐻を伴う遺構

SD-6

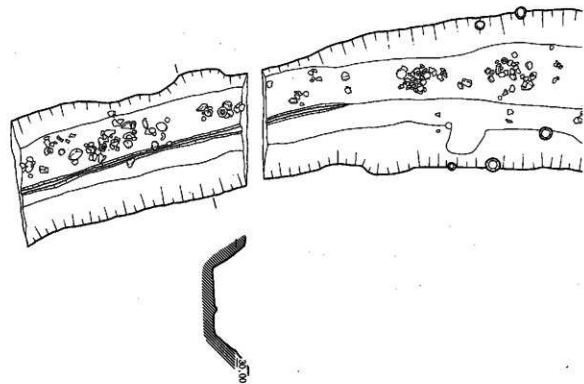
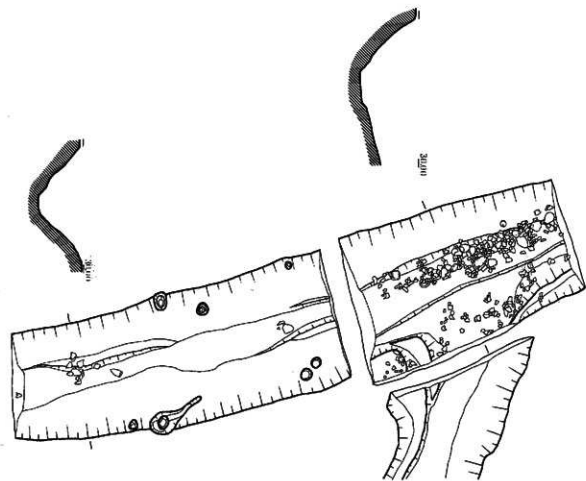
J7区～E8区に位置し、南から北北西に延びG8区から北に走向を変え弧状を呈する。巾3～4m、深さ0.6～1.1m、北端が最も浅く、底部も平坦な面で南に下るにしたがって深くなり、断面梯形状からV字状に形を変える。SD-3と平行しながら南の谷から北走し、東から入ってくる小規模の谷に続く囲郭遺構である。SD-3にみられなかったが、SD-6の土層断面には、弧の東側からの流れ込みが著しく、その為土器などの状態は西側に帯状に連なって検出された。特にNT区では顕著にみられる。この状態はSD-7と接する所で観察でき、このことはSD-6東側に土壘、あるいは堤状の施設を想定できる。



第14図 SD6-NT土器出土状態



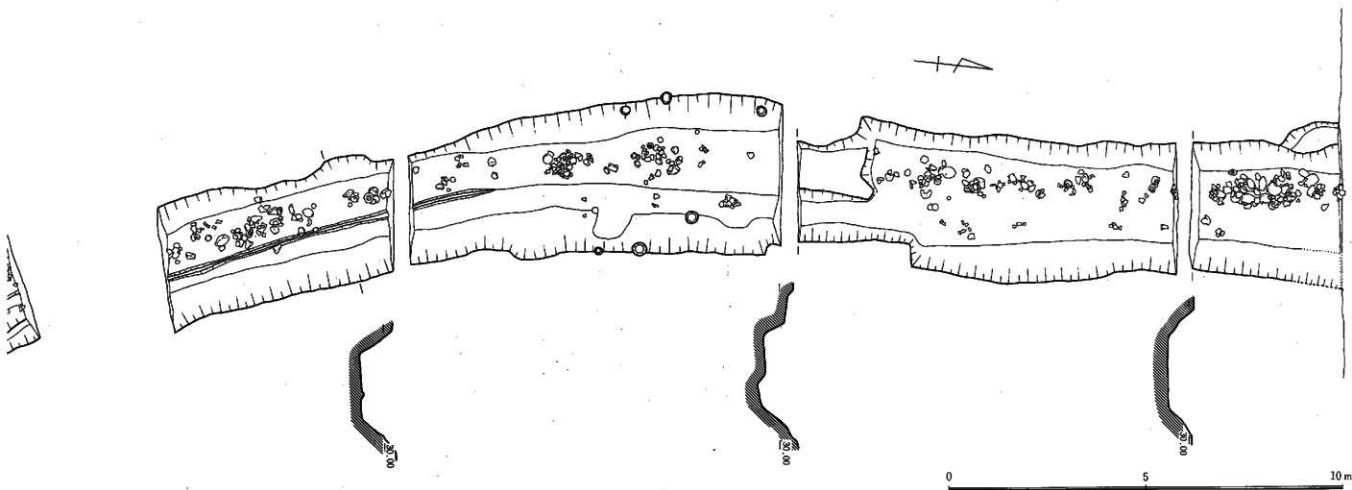
る。巾
て深く
、東か
6の土
差なっ
袋でき、

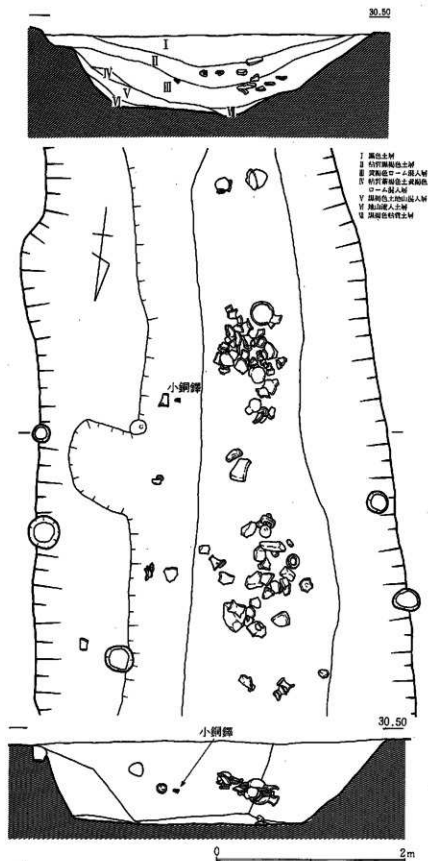


第15図 SD

30_50







第16図 SD 6小銅鐸出土実測図

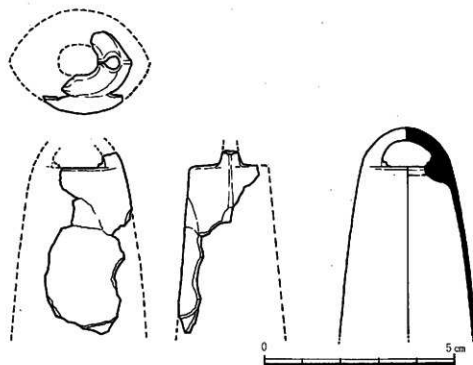
小銅鐸

小銅鐸はSD-6、G8区のやや東寄りの位置、Ⅱ層とⅢ層との間で鉦を東側に身を西側溝内に向けて発見された。状態は穴を掘って埋納したとみられる施設も行為もみられなかった。おそらく土器と同様に腐棄されたものと思える。

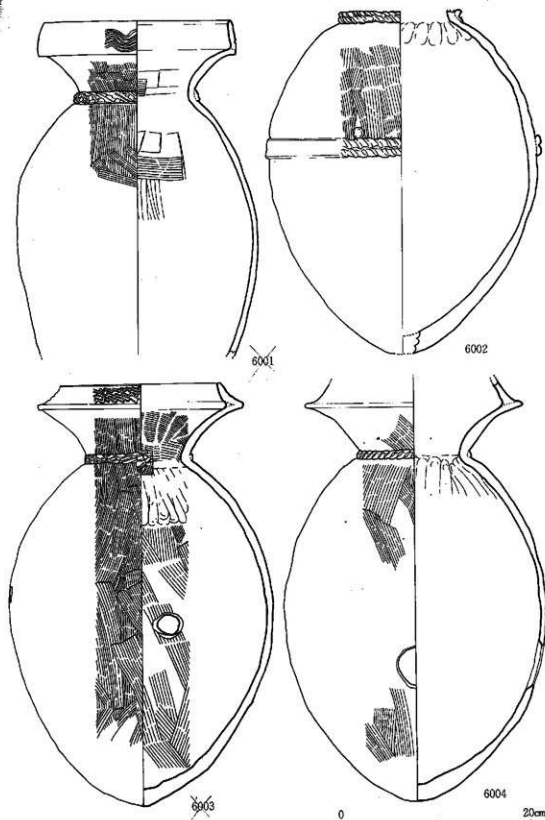
小銅鐸は鉦を欠き裾を欠く状態で、身も半分以上はなく全体の $\frac{1}{3}$ に相当する。遺存状態での計測は縦4.7 cm、紐0.4 cm、舞巾長軸1.7 cm、短軸1.8 cm、鐸身縦4.3 cm、鐸身の厚さ1 mmを測る。

鉦は内傾し菱形環を形成するとみられ、内側に鋳造のままで鍔型の合わせ目に生じた鋳余りがみられる。舞孔は通常短軸上に紐の西側に1対の孔をみるが、多武尾例では中央に1孔、製作時より 1×0.8 cmの隅円形が穿たれてあった。半円形と思われる紐に繞く鐸身は、裾開きとなり、無文である。また中央部四方に通常みられる方形の型持孔はなく、裾部は不明で内部は中空である。

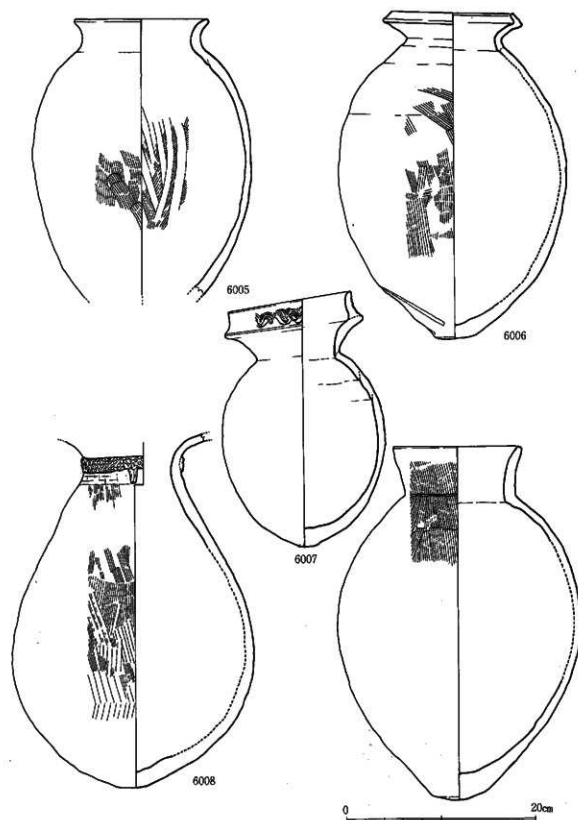
復元すると、縦5.5 cm以上、舞巾長軸2.4 cm、短軸2 cm、裾部は長軸3.5 cm以上、短軸2.8 cm以上程度を測る。この計測を基に朝鮮式小銅鐸と比較すると、かなり小形ではあるが、外形は朝鮮式小銅鐸の特長となんら相異は認められず、異なる所は舞孔、型持せの孔の2点である。



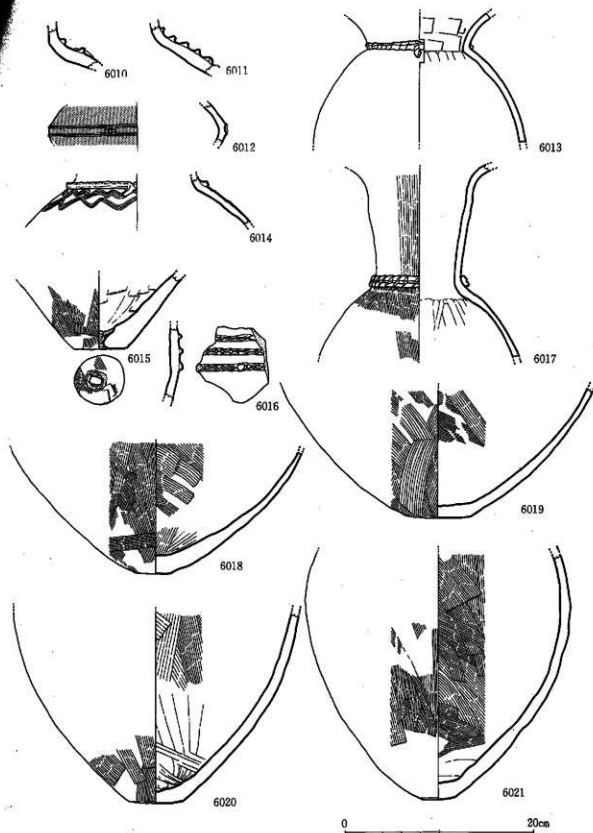
第17図 小銅鐸実測図及び復元図



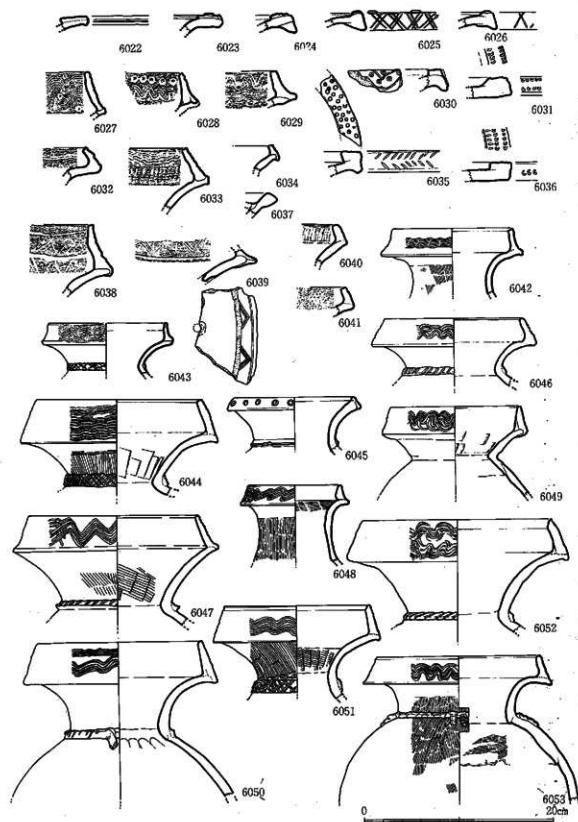
第18図 SD 6出土土器実測図



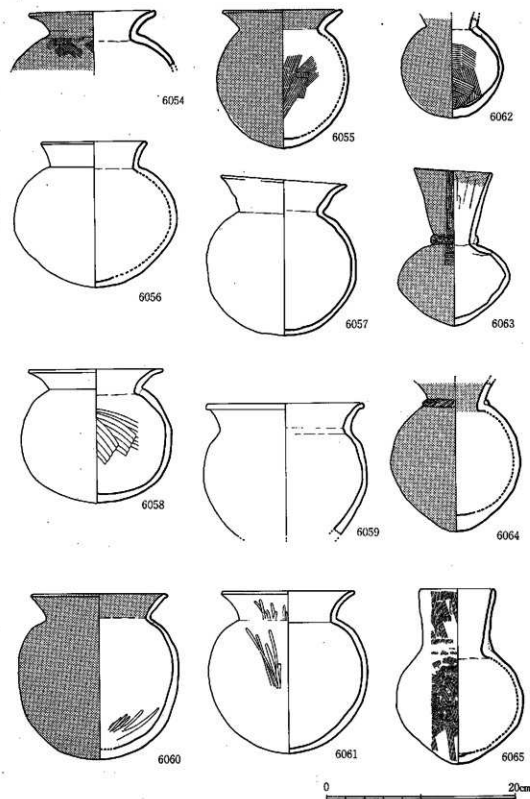
第19图 SD 6出土土器实测图



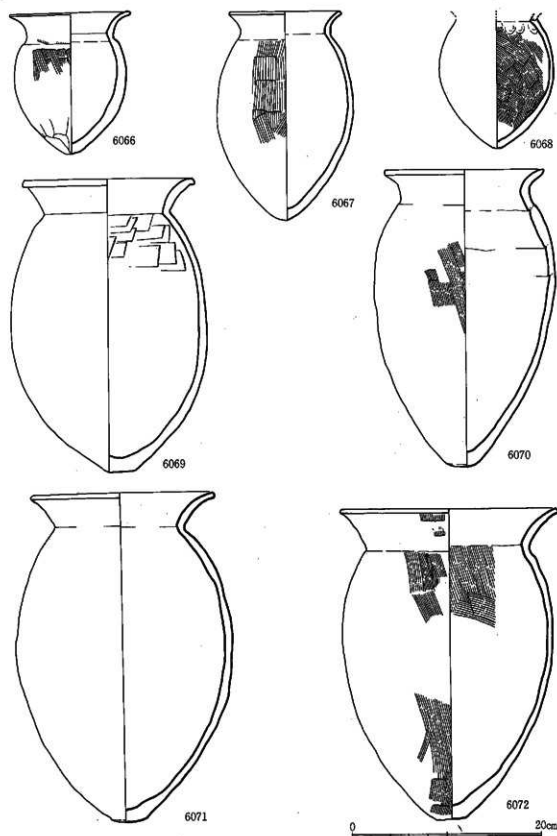
第20图 SD 6出土土器实测图



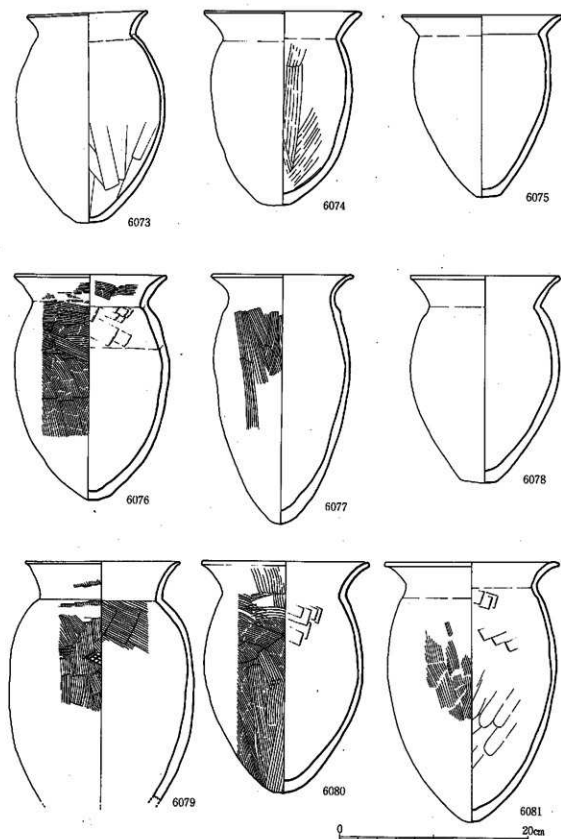
第21图 SD 6出土土器实测图



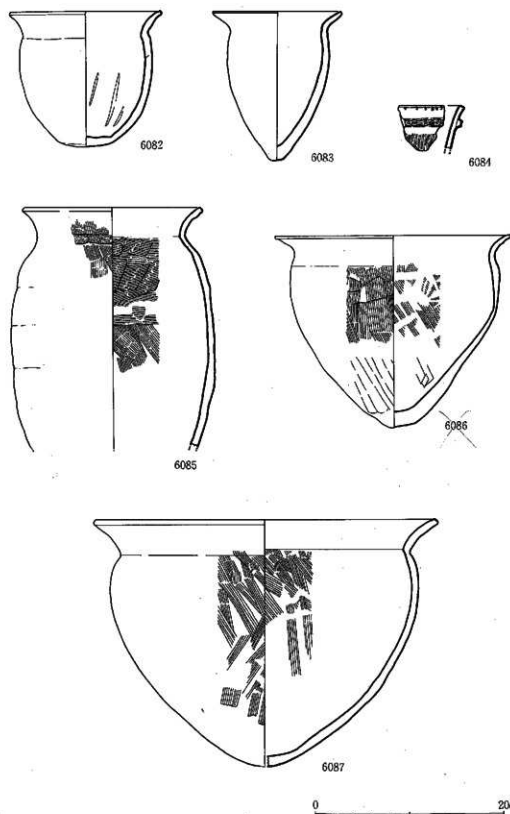
第22图 SD 6出土土器实测图



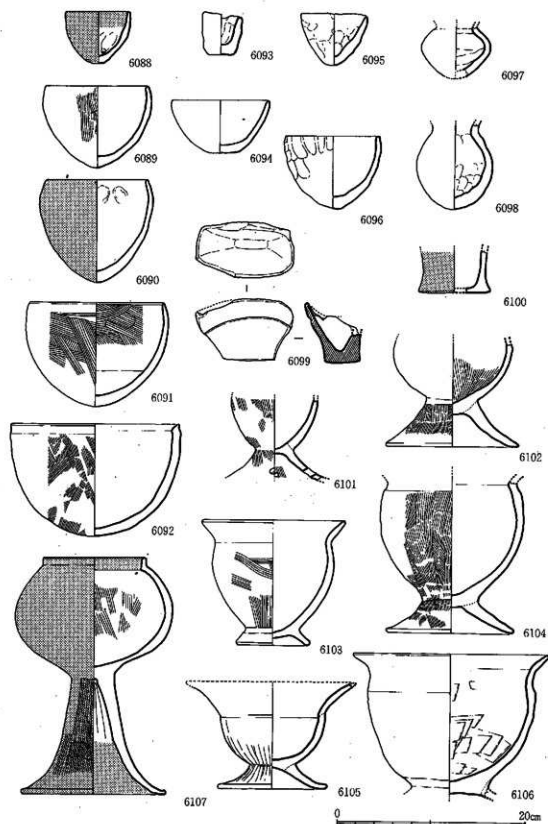
第23图 SD 6出土土器实测图



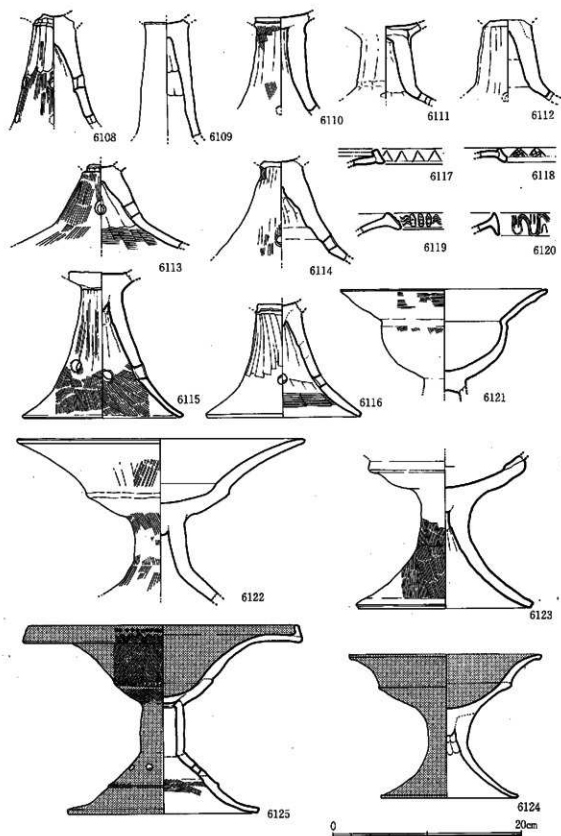
第24图 SD 6出土土器实测图



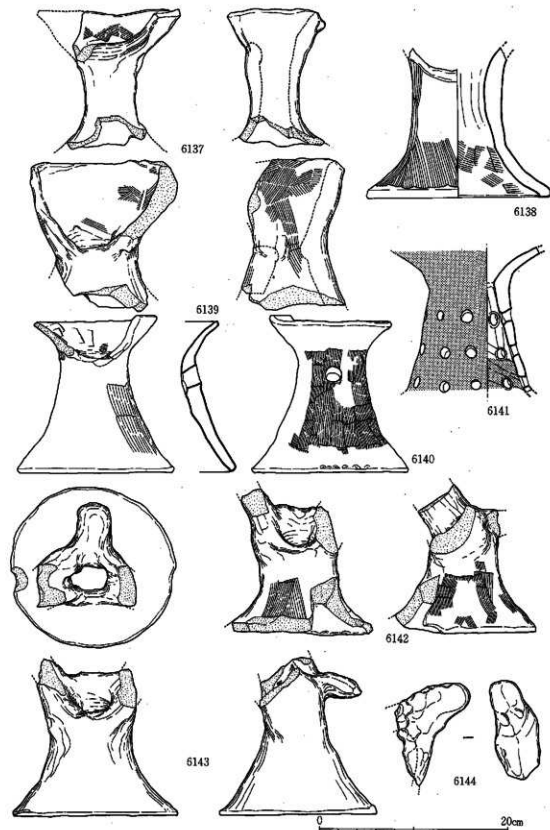
第25图 SD 6出土土器实测图



第26图 SD 6出土土器实测图



第27图 SD 6出土土器实测图



第28图 SD 6出土土器实测图

[illegible]

表4 SD 6 出土土器觀察表

植物名	葉	花	果	土	形態の特長	葉	花	備考	出典
3036	草	上	葉	緑	葉は5〜7センチ、長楕円形、口縁端は浅鋸歯し、口縁部と上縁部は鋭角	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ	ナニシ 作付文 植物図	68
3037	草	上	葉	黄緑色	葉は長楕円形より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3038	草	上	葉	黄緑色	葉は5センチ、卵形、5〜7センチ、平ら、5〜7センチ、平ら	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3039	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい、葉部は大きく上と	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3040	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3041	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角、長楕円形	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ	2次成 成	
3042	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3043	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3044	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3045	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3046	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3047	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3048	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3049	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3050	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3051	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3052	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3053	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3054	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3055	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3056	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3057	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3058	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3059	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3060	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3061	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3062	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3063	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3064	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3065	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3066	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3067	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3068	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3069	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		
3070	草	上	葉	黄緑色	口縁部は鋭角より小さい	内面	葉はハハコナ、口縁部内外面ハコナナ		

表5 SD 6出土土器觀察表

[illegible]

表6 SD 6出土土器觀察表

作品番号	巻数	色紙	装丁	形態の特長	展覧	備考
6100	甘付餅	黄緑色	砂目	※	内面 木ノコザ、口縁面内共木ノコザ 外側 ハケマツ	
6101	餅付口縁	赤褐色	※	※ 餅付口の 裏面に無い直立する凸線、縁割をつける	内面 ハケマツ、口縁面は木ノコザ 外側 餅付口縁のみへう研磨、餅付ハケマツ	丹丸 69
6102	黄	黄緑色	※	※ 縁面に平直面と接合する為の縁割線がある。 通し4枚を3段に配す	内面 黄ハケマツ	
6103	※	赤褐色	※	※ 接合面は無い	外側 ハケマツ	
6110	※	※	※	※ 縁上との接合は裏にそれぞれを接合しただけのもの? 通し4枚	内面 へう研磨	
6111	※	暗褐色	※	※ 縁割線を縁面に接合、縁はあまり大きく開くが 外側は縁割をつける。内面はつける。通し4枚	内面 へう研磨	
6112	※	赤褐色	※	※ 接合面は6109と同様、形跡は6111と同様 通し4枚	内面 へう研磨	
6113	※	暗褐色	※	※ 接合面は6108と同様、2段に接って横割線で 通し4枚	内面内共 ハケマツ	
6114	※	黄緑色	※	※ 通し4枚	内側 ハケマツのみ研磨	
6115	※	※	※	※ 餅付口縁と平との接合は縁面より粘土土層を充填、 通し5枚	内面 ハケマツ	
6116	※	※	※	※ 6115と同形跡 通し4枚	内面 ハケマツ 外側 へう研磨	
6117	※	※	※	※ 6125に代えられる呼び縁割線 が裏に縁割線と文を施す	内面 ハケマツ	
6118	※	※	※	※ 6126と同様 が裏に縁割線と文を施す	内面 ハケマツ	
6119	※	赤褐色	※	※ 6123と同様 に縁割線を断面に透かし、透かし面に餅付口縁を施す	内面 ハケマツ	
6120	※	黄緑色	※	※ 6125と同様 に縁割線を断面に透かし、透かし面に縁割線と文を施す	内面 へう研磨 外側 金ハケマツのみ研磨	69
6121	※	※	※	※ 縁割線の縁面に無い直立する凸線、縁割で縁割が つくと思われ、6125が4段に透かししたものを 6122とする。通し5枚	内面 へう研磨 外側 金ハケマツのみ研磨	
6122	※	赤褐色	※	※ 接合面は6115と同様、厚肉縁割で接合となし てより、穴あきする凸線。通し6112と同様	内面 へう研磨 外側 金ハケマツのみ研磨	
6123	※	※	※	※ 6122と同様	内面 へう研磨 外側 縁割ハケマツ	
6124	※	※	※	※ 縁割の凸線縁割でつづく穴あきする凸線は、縁はラッパ 状に開く。通し6113に代えられるもの? 通し5枚	内内共 へう研磨	丹丸 69
6125	※	※	※	※ 断面に穴あきする縁割で穴あきする穴あきする縁割で 縁割に穴あきする縁割。縁割は3段に透かしする もの? 通し5枚	内面 へう研磨、口縁面は木ノコザ 外側 ハケマツ、断面はへう研磨、縁割ハケマツ	69
6127	餅	赤褐色	※	※ 受け面にえぐりを入れた縁面より	内面 上はハケマツ	
6128	※	※	※	※ 受け面にえぐりを入れた	内内共 ハケマツ	
6130	※	黄緑色	砂目	※ 受け面にえぐりを入れた。金ハケマツに縁面より、あ いまいと縁割縁面を接合するもの? 通し5枚	内面 ハケマツ	
6140	※	黄緑色	※	※ 受け面にえぐりを入れた。黄緑色に1枚差し を施す	内内共 ハケマツ	
6141	※	赤褐色	縁割ハケマツ	※ 縁割の凸線縁割で通し、下ラッパ状に開く 通し、3段の1枚10枚	内面 へう研磨の縁割ハケマツ	丹丸 70
6142	※	赤褐色	砂目	※ 縁割縁面、左方に縁割の裏面を接合、後縁にも同 じ縁割をつける。通し5枚	外側 台付正江ハケマツ、それ以外縁割ハケマツ	
6143	※	黄緑色	※	※ 6142と同様		69
6144	※	赤褐色	※	※ 縁割縁面の裏の部分		

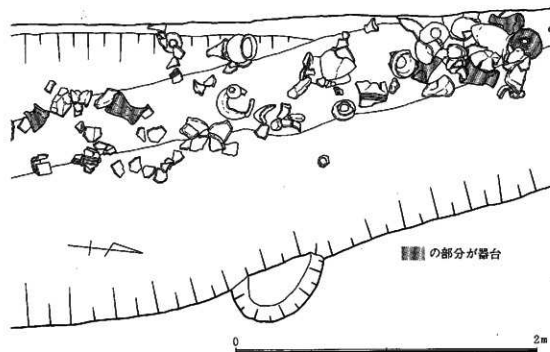
表7 SD 6出土土器觀察表

SD-3

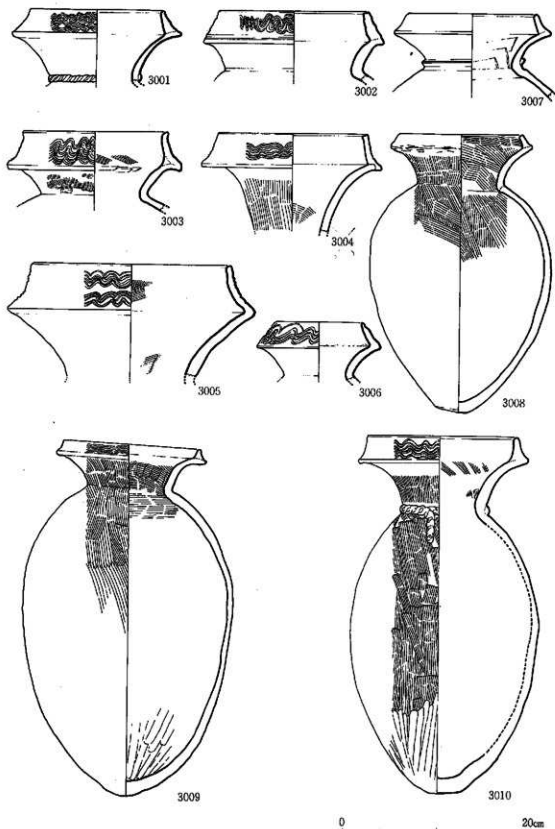
SD-6の西側E7区～J8区に位置する。J8区からG7区まで北北西に走り、G7区から北に向きをかえ弧状に走る。SD-6と平行して南の谷から台地を分断しながら北の谷に走るものと思える。

巾2～3m、深さ1～1.1mを測り、SD-6と同じく北端で断面梯形、南に下るにしたがって断面はV字形を呈する。北端と南端との深さを底部より計測すると約10cmの差を生じるが、標高130mを基準に計測すると約60cmの差があり、元の地形が南側より北側に緩く上り傾斜であり、調査区北端あたりがこの台地の高所であったと思われる。

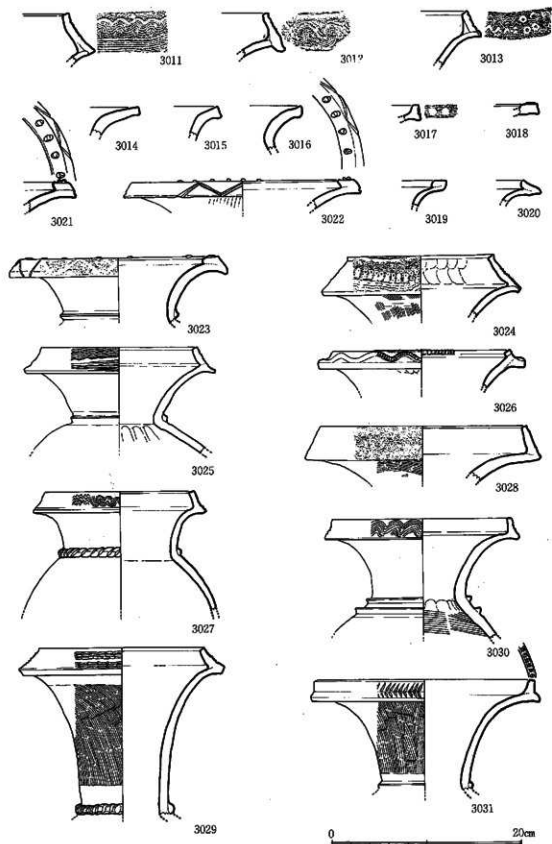
溝の状態は、SD-6と異なり自然堆積を示す。土層等の埋没を示す土層はみられず、遺物は溝中央を帯状にⅠ～Ⅱ層間に集中して検出した。特にGH・7区では器台が一括して廃棄された状態であった。他の地区には散発的にみられる程度である。



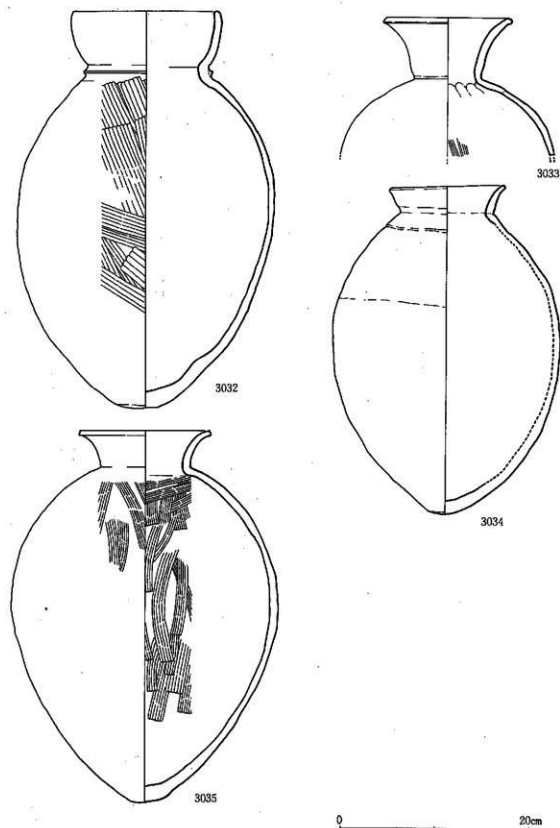
第29図 SD3器台出土状態実測図



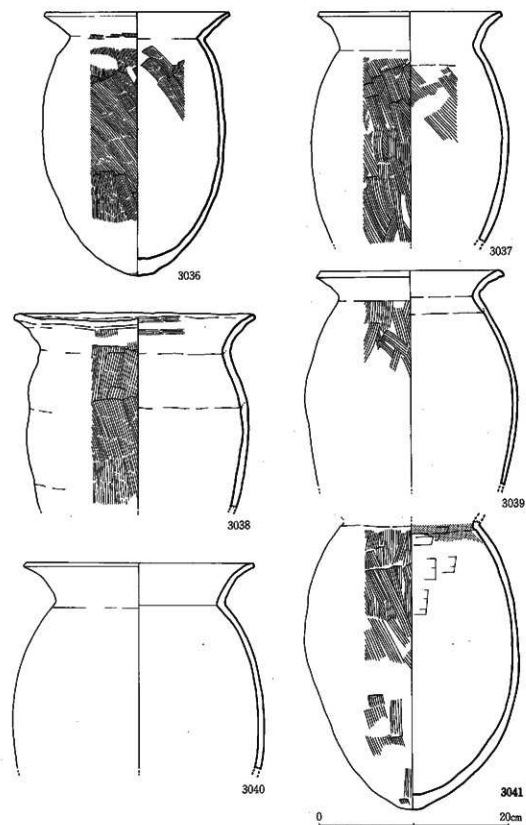
第30図 SD3出土土器実測図



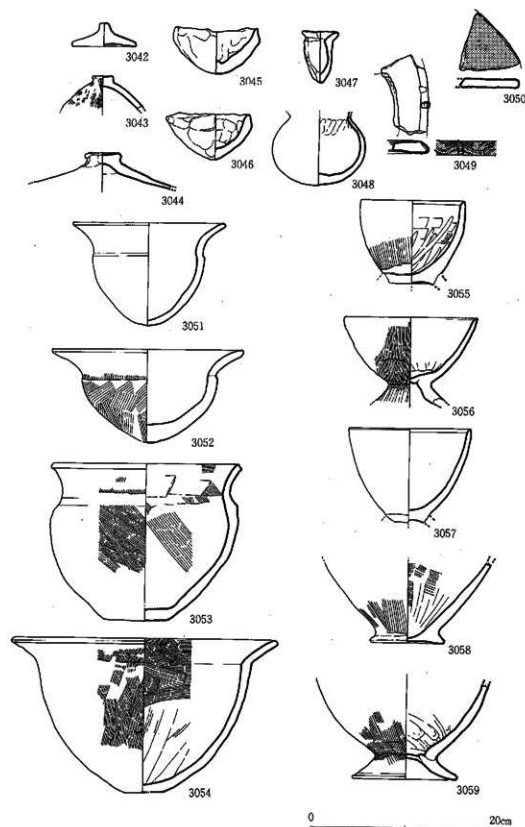
第31图 SD 3出土土器实测图



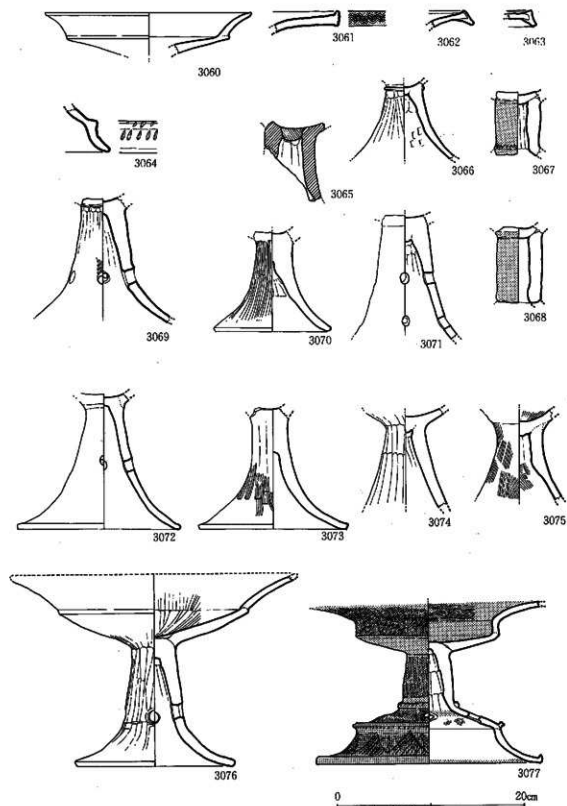
第32图 SD 3出土土器实测图



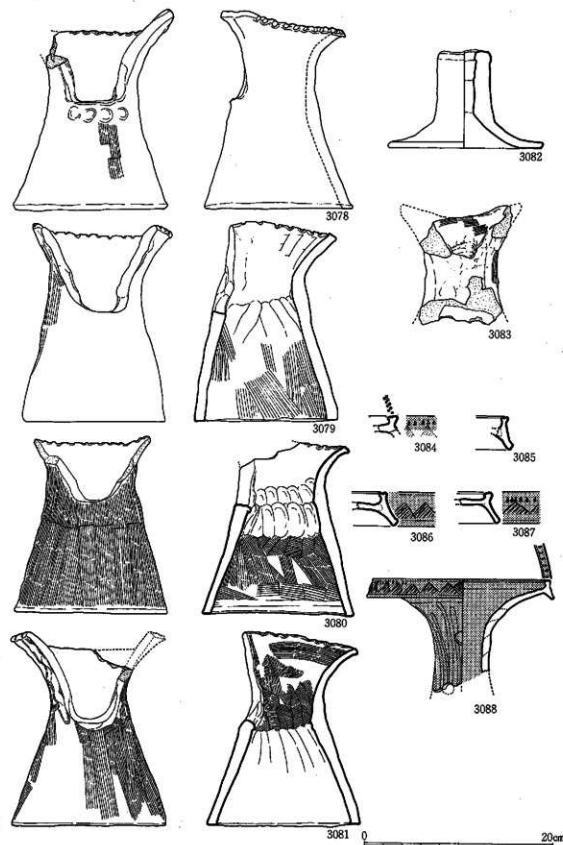
第33图 SD3出土土器实测图



第34图 SD3出土土器实测图



第35图 SD 3出土土器实测图



第36图 SD 3出土土器实测图

図番号	群 名	色 名	土 質	地 理 的 特 徴	質 量	備 考	備考 Fig.
3001	混合土層	黄褐色	砂粒多	地盤にキズリ貫通を繰り返す			
3002	"	"	砂粒多	口縁部と底面部の厚さは同じ厚さが同じ	内層 腐植、底面腐植コナダ		
3003	"	赤褐色	"	底面は内径より、先端で若干厚くなる、口縁部と底面部の厚さはほぼ等しい	内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ		
3004	"	黄褐色	砂粒多	底面は内径内側	内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ		
3005	"	"	"	"	内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ		
3006	"	"	"	底面部の先端は尖り無状	内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ		
3007	"	暗灰色	"	地盤に二角形をもちつつける、底面内径内側	底面腐植コナダ 内層 口縁部、砂粒1粒のナメ		
3008	"	黄褐色	砂粒多	右側を口縁に近く(内層)を底面、底面は若干厚く非対称である、底面内径内側	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3009	"	"	砂粒多	右側を口縁に近く(内層)を底面、底面は若干厚く非対称である、底面内径内側	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		60
3010	"	"	"	底面部は直立状、断面は角形で平直、底面にキズリ貫通を繰り返す	内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ		60
3011	"	"	"	底面腐植外周縁、上部は直立状、下部は底面	内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ 内層 口縁部粘土ナメ、底面腐植コナダ		
3012	"	赤褐色	"	底面腐植外周縁、底面、断面は若干厚く非対称である	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3013	"	"	"	底面腐植外周縁、底面、断面は若干厚く非対称である	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3014	腐 形 土 層	黄褐色	"	底面腐植に2層にわたって	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3015	"	暗褐色	"	底面腐植に開口は若干厚くなる	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3016	"	黄褐色	"	内径より口縁部は口縁部を若干厚くなる	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3017	混合土層	"	"	地盤を貫通する底面腐植に付着を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3018	"	"	"	3023と同様	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3019	"	"	"	外径より口縁部は先端で底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3020	"	"	"	外径より口縁部は先端で底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3021	"	"	"	3023と同様	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3022	"	"	"	外径より口縁部は底面を繰り返す、断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3023	"	"	"	3022と同様で先端で若干厚くなる	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		内径より
3024	"	赤褐色	"	底面腐植は若干厚く、断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3025	"	黄褐色	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3026	"	"	"	口縁部内径内側より若干厚くなる、断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3027	"	砂粒多	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3028	"	黄褐色	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		内径より
3029	"	黄褐色	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		60
3030	"	"	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3031	"	黄褐色	砂粒多	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3032	単 口 縁 部	黄褐色	砂粒多	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		内径より
3033	"	黄褐色	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		60
3034	"	"	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		
3035	"	砂粒多	"	断面は若干厚く非対称に断面は底面を繰り返す	内層 腐植、口縁部、底面腐植コナダ 内層 腐植コナダ、口縁部、底面腐植コナダ		60

表8 SD 3出土土器觀察表

[illegible]

表9 SD 3出土土器觀察表

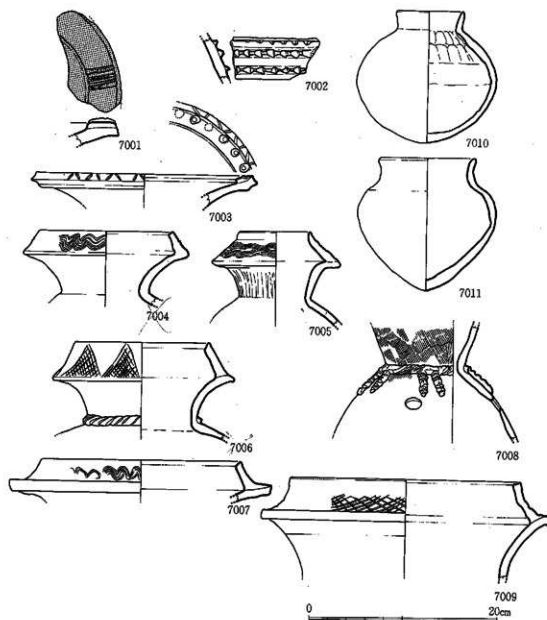
遺物番号	器種	色	土質	断面の特徴	図	備考	Fig. PL
3971	高 坪	黄褐色	砂 粒 多	接合部は黒灰、逆しは2段4ヶ	外面 ハケメ		
3972	"	黄褐色	"	" 1段4ヶ	内外面 ヘラ刷		
3973	"	"	"	逆しなし	外面 上段ナゲ、下段ハケメ		
3974	"	黄褐色	"	接合部は赤土黄灰面	外面 本口ナゲ		
3975	"	"	"	接合部は黒灰	内面 ハケメ		
3976	"	赤褐色	"	坪面中段に黒を塗り、断面的に外反する口縁	内面 坪面ヘラ刷		
3977	"	"	黒砂粒多	接合部は黒に赤土を塗り、坪面中段に黒を塗り、断面的に外反する口縁	内面 坪面、断面にヘラ刷		
3978	蓋	黄褐色	"	坪面は下段で黒を塗り、口縁につけ、水平に近く外反する。断面に黒い線から1段目まで黒く、6段と黒線。	外面 坪面はハケメ、断面は黒にハケメ	丹塗り	55
3979	"	赤褐色	"	断面に黒い線から1段目まで黒く、6段と黒線。	外面 ハケメ		
3980	"	赤褐色	"	"	内面 上段、本口ハケメ、中段ナゲ、下段ハケメ		56
3981	"	赤褐色	"	"	内面 上段ハケメ、中段ナゲ、下段ハケメ		
3982	"	赤褐色	"	"	外面 上段ハケメ、下段ナゲ		58
3983	"	黄褐色	砂 粒 多	口縁に黒い線が1段。支脚7	全体ナゲ		
3984	"	赤褐色	黒砂粒少	断面で受け部に入り込みを入れる。器内は黒ぼろく減なりである。	外面は黒なハケメ		
3985	"	"	"	3000に代表される断面黒白の受け部、両側の口縁部		丹塗り	
3986	"	"	"	"		"	
3987	"	"	"	"		"	
3988	"	"	"	外反する口縁部に黒い線が1段目まで黒く、断面に黒い線から1段目まで黒く、6段と黒線。	内面 ナゲ		
				断面に「3」の断面の黒文を施し、外側には黒文	外面 ヘラ刷		

表10 SD 3 出土土器観察表

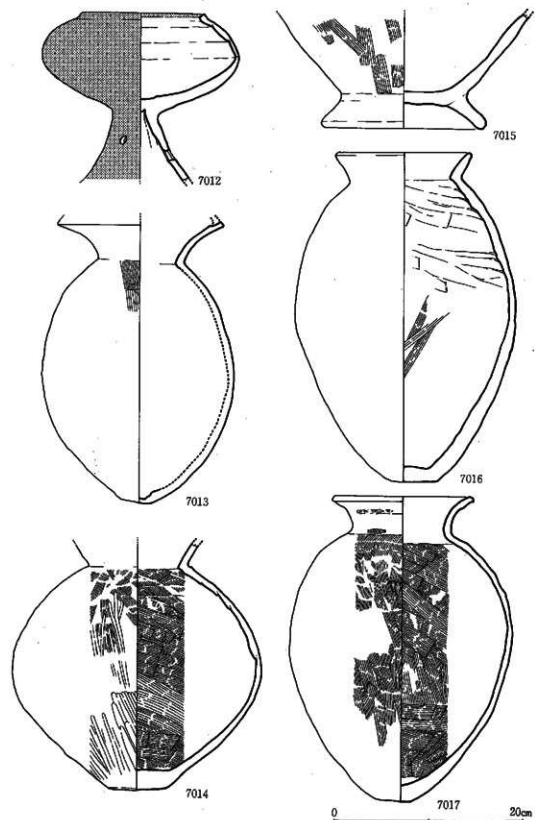
SD-7

I 9 区のSD-6 から分離し、東南に弧状に走る巾 2 m、深さ 0.9 ~ 1 m の V 字状を呈する。埋土の状態は、著しい流入はみられない。

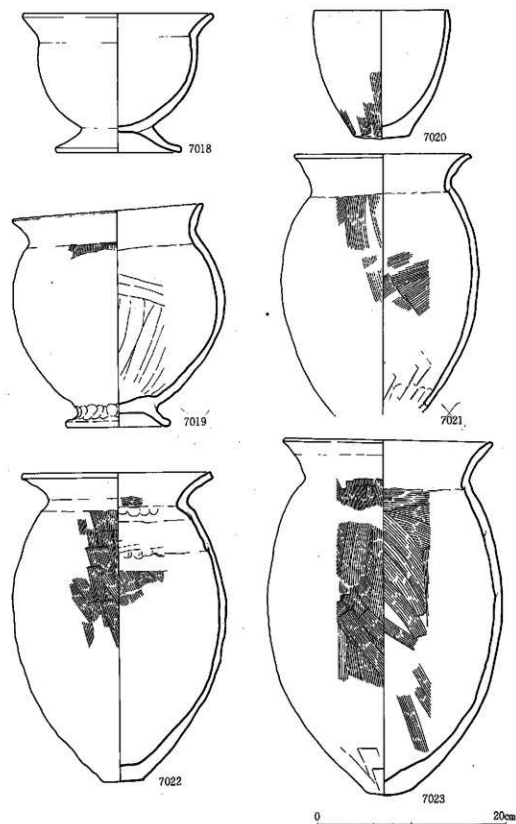
遺物は I 層（黒色土層）に土器片が敷きつめられたような状態で検出した。器台 7041 の大半は I 層に集中していたが、数片は底部付近で検出される状態で遺物は層位的新旧関係をとらえられなかった。



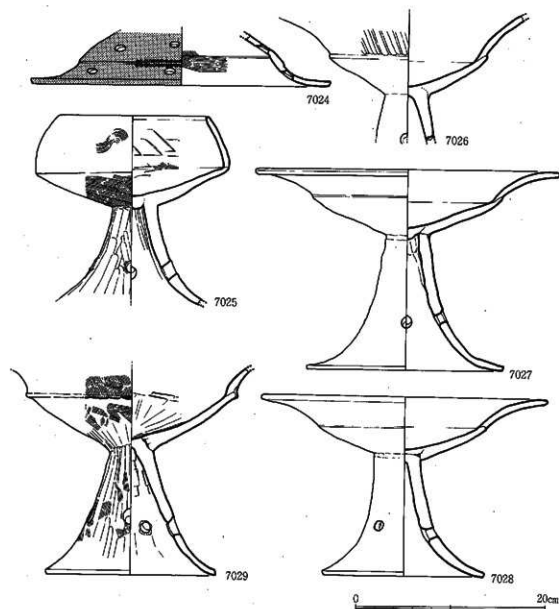
第37図 SD 7 出土土器実測図



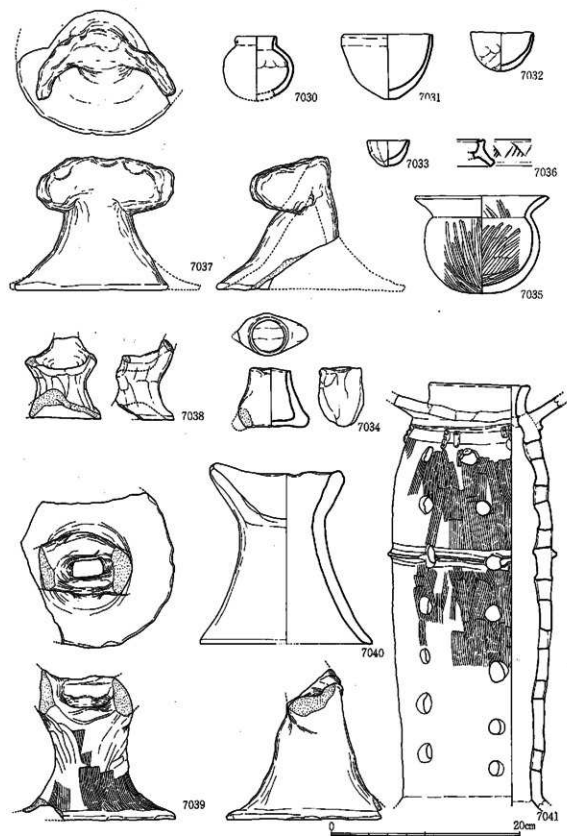
第38图 SD 7 出土土器实测图



第39图 SD 7 出土土器实测图



第40图 SD 7 出土土器实测图



第41图 SD 7 出土土器实测图

[illegible]

表11 SD 7 出土土器觀察表

製品番号	原 産 国	材 質	特 徴	備 考
T086	■ 台	赤色砂	口縁部が直線にはならず 外側に曲線文を施す	
T097	"	"	口縁部に左右の翼をつける	70
T098	"	"	左右に翼をつけ、底部に突起をつける	
T099	"	茶褐色	口縁部に左右の翼をつける。T097より上位 類に近づく。	
T408	"	"	受け面に入りこみがある	
T410	"	"		70
T481	■ 陶板	緑黄色砂	中央の円周で、口縁部は直線的になる。縦線に厚手の押印文をもつて記し、上部に三角 状の突起をつけ、下部に尖刺状のものをつける。設片・内底は通常、平面ハズレ	70

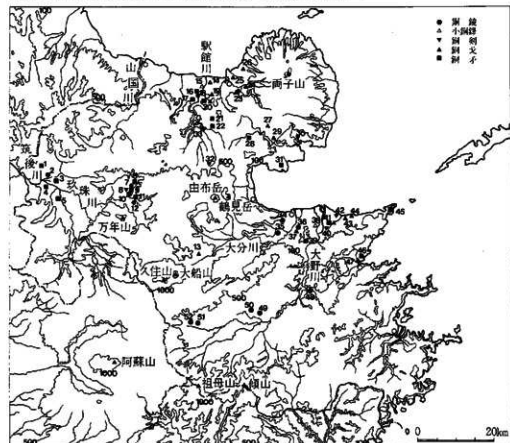
表12 SD 7 出土土器觀察表

第4章 まとめ

1. 本遺跡は、弥生時代後期終末に営まれた竪穴式住居跡と濠状遺構跡を主体とする囲郭施設をもつ集落跡である。
2. 住居跡は、4軒検出し内3軒は円形を呈している。従来九州では弥生時代後期の竪穴住居跡は、平面プランが方形とするのが一般的であり、北九州地域では中期から後期に移行するに当たって円形から方形に変化する現象がみられる^(註1)。大分県下においても後期の住居跡の平面プランが方形を呈する事は過去の報告された遺跡の範疇を出る事はなかったが、大分川下流域の守田遺跡に後期終末の円形プランを呈する住居跡が6軒検出している。これらの資料は円・方形混在地域である瀬戸内沿岸との関連を追求するうえで良好な資料と思われる。
3. 集落の形態について言及すれば、比高差20mの台地上に立地し東側は急崖で大野川及びその間の沖積地さらに別府湾の海岸線を一望できる。西側の越峠段丘と隔絶させる為2本の濠状遺構と土塁等の施設を想定できる事から、防衛的性格をもった集落と思われる。
4. 濠状遺構跡検出の土器群は、瀬戸川は構築後漸次堆積したのではなく比較的短期間に堆積したものであり、層位による時期差は認められなかった。

土器を形態別に観察すると複合口縁蓋は、胴部の最大径は中位が主体であり、底部は若干尖り気味の丸底のものや丸味を帯びた平底を呈す。頸部は突帯を施すものもないものがあり、施すものの中には三角突帯、キズミ三角突帯、斜行子状の突帯がある。口縁部は外反し蓋部内は内傾あるいは内反する。拡張部外周は波状文を主体とし、他に竹筭文、縞縞文、羽状文等がみられる。調整はノケメ主体で木口文の板状工具での強いナツケもみられる。全体に成形・調整は雑である。形態・施文を含めて北九州系の様相が強い(6042、6048、7005、7007)ものと西部瀬戸内系(6039)、中部瀬戸内系(3024、3026、3031、3045)の影響を受けたものが掲げられ、それぞれの地域との交流を強く示す様相を呈している。彫形土器は、口縁部最大径より胴部最大径の方が大きくなるものが主流をなし、底部は尖り気味の平底と丸味を帯びたものが混在し、丸底化する傾向をみせている。調整は

外ハケメが主体である。一部(6079)に胴部外側上位にタキを行いのにハケメを施すものもみられ、(6073、6087)の胴部内側下位にみられるへう削り風の木口あるいは板状工具で強くナデクている調整もみられる。へう削りは破片で観察しているだけで形態は明瞭でない。高環形土器は、環部の中位で腰をつけ短く外反するものと、長く横に外反するものとが主流をなしている。注目されるのは、坏底部は丸く口縁部は大きく外反し、さらに先端で短く内傾する拡張部を形成し、脚部は短い筒状で裾はゆるやかに2段にわたって開くもの(6125)と、環部は段皿状を呈し、脚部は短い筒状で裾は鋭く2段に開き、裾部で腰をなす部分には突帯を貼りつけ突帯下に「3」状の連続竹管文を施す(3077)があり、これらは安国寺遺跡で賀川氏が分類した高環1類と思われる。器台形土器は、鼓形、鼓形で上部をえぐったもの、大形の筒形、有翼形がある。



大分県出土の青銅器分布図	大分県出土の青銅器分布図	大分県出土の青銅器分布図	大分県出土の青銅器分布図	大分県出土の青銅器分布図
1 大分県 (大分県)	2 大分県 (大分県)	3 大分県 (大分県)	4 大分県 (大分県)	5 大分県 (大分県)
6 大分県 (大分県)	7 大分県 (大分県)	8 大分県 (大分県)	9 大分県 (大分県)	10 大分県 (大分県)
11 大分県 (大分県)	12 大分県 (大分県)	13 大分県 (大分県)	14 大分県 (大分県)	15 大分県 (大分県)
16 大分県 (大分県)	17 大分県 (大分県)	18 大分県 (大分県)	19 大分県 (大分県)	20 大分県 (大分県)
21 大分県 (大分県)	22 大分県 (大分県)	23 大分県 (大分県)	24 大分県 (大分県)	25 大分県 (大分県)
26 大分県 (大分県)	27 大分県 (大分県)	28 大分県 (大分県)	29 大分県 (大分県)	30 大分県 (大分県)
31 大分県 (大分県)	32 大分県 (大分県)	33 大分県 (大分県)	34 大分県 (大分県)	35 大分県 (大分県)
36 大分県 (大分県)	37 大分県 (大分県)	38 大分県 (大分県)	39 大分県 (大分県)	40 大分県 (大分県)
41 大分県 (大分県)	42 大分県 (大分県)	43 大分県 (大分県)	44 大分県 (大分県)	45 大分県 (大分県)
46 大分県 (大分県)	47 大分県 (大分県)	48 大分県 (大分県)	49 大分県 (大分県)	50 大分県 (大分県)
51 大分県 (大分県)	52 大分県 (大分県)	53 大分県 (大分県)	54 大分県 (大分県)	55 大分県 (大分県)
56 大分県 (大分県)	57 大分県 (大分県)	58 大分県 (大分県)	59 大分県 (大分県)	60 大分県 (大分県)
61 大分県 (大分県)	62 大分県 (大分県)	63 大分県 (大分県)	64 大分県 (大分県)	65 大分県 (大分県)
66 大分県 (大分県)	67 大分県 (大分県)	68 大分県 (大分県)	69 大分県 (大分県)	70 大分県 (大分県)
71 大分県 (大分県)	72 大分県 (大分県)	73 大分県 (大分県)	74 大分県 (大分県)	75 大分県 (大分県)
76 大分県 (大分県)	77 大分県 (大分県)	78 大分県 (大分県)	79 大分県 (大分県)	80 大分県 (大分県)
81 大分県 (大分県)	82 大分県 (大分県)	83 大分県 (大分県)	84 大分県 (大分県)	85 大分県 (大分県)
86 大分県 (大分県)	87 大分県 (大分県)	88 大分県 (大分県)	89 大分県 (大分県)	90 大分県 (大分県)
91 大分県 (大分県)	92 大分県 (大分県)	93 大分県 (大分県)	94 大分県 (大分県)	95 大分県 (大分県)
96 大分県 (大分県)	97 大分県 (大分県)	98 大分県 (大分県)	99 大分県 (大分県)	100 大分県 (大分県)

第42図 大分県出土の青銅器分布図

※ 形式分類は「青銅の武器」九州歴史資料館 1980、を引用した。

総じて本遺跡出土の土器群は、在地で主体をなすハケメ・ナデ等の調整の他に、へう削り、タキの外来系の調整は一部であるが認められる。製作技法等において在地土器の組成に大きな影響を占める事が変革的な様相として捉えるなら、濫状遺構検出の土器群を観察した限りではハケメを主体とする在地技法は依然として固執的であり、壺形土器、甕形土器などの器形は丸底化する傾向にある。高環形土器においては畿内の様相を呈した器形も現われ、在地の土器群に瀬戸内以東地域の影響を受けた土器が現われ始める段階として理解しておきたい。

5. 小銅鐸の発見は、これまで九州で発見された小銅鐸と同様集落の廃絶に関わるものであった。銅器の住居跡廃棄として小銅鐸の他に鏡片があり、近年大分県下では終末期の住居跡から鉾鏡片、小型仿製鏡の発見が増加しており、現在まで10遺跡19例を数える。これに葛城例を含めると13遺跡22例となる。

葛城例は日田、玖珠地域に限られ副葬品として発見されている。住居跡から発見された遺跡は全て安国寺式土器の分布する地域であり、日田・玖珠地域は分布圏外での発見であった。安国寺式土器の分布圏内での小銅鐸と銅鏡片廃棄の共通点は、集落を通じての現象である事と廃棄された時期がほぼ同じであり、古墳時代に入る前に廃棄せねばならなかった性質のものであった事が掲げられる。しかし廃棄以前のそれぞれの役割については今後資料の増加をもって検討せねばならない。

さらに小銅鐸の発見された地域は、銅鏡の他に細形戈、中広戈、中広矛が集中する所であり、小銅鐸のみならず九州での青銅器製造開始時期を追求するうえで関連づけて検討する必要がある。

註1 高倉祥彰、下条信行「室台遺跡」日本住宅公園 1970。

註2 大分県教育委員会「守門遺跡」 1979。

註3 山本一朗「山口県の土器群・須恵器・防長の土器群」周知考古学研究所 1981。

(6039)の様なタイプは防長では7式に出現し、10式に属する様である。

註4 賀川光夫「大分県東国安国寺弥生式土器の調査」九州総合文化研究所 1968。

(3077、6125)の様なタイプの高環は現在まで北陸から南九州に至る地域までみられるが、多く検出をみない。検出例を掲げる「金沢市セツマ1号墓」後期・「茨木市東新良遺跡」庄内古段・「愛媛県土佐市北遺跡」後期中葉・「山口県古田一丁田遺跡」庄内併行期・「大分県安国寺遺跡」庄内併行期・「宮崎県東平下1号周溝墓」等である。

註5 高橋啓「古文化談義」第6集「廃棄された鏡片」の中で高橋氏は、「……弥生時代的なもの否定」としてとらえている。

多武尾小銅沢の系譜

小田 富士雄

これまで九州で発見された銅沢およびその銅型を発見年順に示せばつぎのようになる。

1960 福岡県春日市小倉・大南	突縁帯装飾文銅沢(図版2-8)	高10.1cm
1977 大分県宇佐市別府	朝鮮式小銅沢(図版2-9、12)	高11.8cm
1978 福岡県春日市大谷	無文銅沢石型片(裾裾に鋸歯文追刻・片麻岩)	(図版1-1) 推高20cm
1979 福岡県春日市須賀・岡本	無文銅沢石型(片麻岩)(図版1-2)	高5.9cm
1980 佐賀県鳥栖市柚比町安永田	横帯文銅沢石型(花崗岩)(図版1-4~7)	推高20cm
1981 大分県大分市横尾・多武尾	無文銅沢片	推高5.6cm
1982 福岡県福岡市博多区赤穂・浦	横帯文銅沢石型(砂岩)(図版1-3)	推高20cm

大南沢(図版2-8)は後期の集落に伴う環溝内に廃棄されていた。後半ごろまで下る可能性があり、銅質も良くない。突縁(装飾)文沢の模倣であろう。別府沢(図版2-9)は終末期の土器とともに堅穴住居内に廃棄され、しかも故意に一撃してつぶされた状態であった。周縁の鱗や通常の沢にみられる身と蓋の対をなす型持孔もなく、身の中央と側面に1個の方孔をもつ。のちに復原して韓国忠清南道興寧府沢(図版2-10)より後出タイプである慶尚北道入室里の第1号沢(図版2-11)に近似した大きさ、形状となることがわかった(図版2-12)。中期以前に韓国から流入したものが伝世したのであろうと考えられる。大谷沢型(図版1-1)は中細矛型とともに同一住居跡から発見され、ともに片麻岩であった。この遺跡では細形刺型2(片麻岩)、中広戈型1(砂岩)、中広矛型1(砂岩)が発見されており、伴出土器によって中期後半から末頃とされている。沢型から推定される大きさは約20cmで、その石材とも合せて朝鮮式小銅沢の形態が推測できる。その後これと接合する裾裾沢型片が知られたが鋸歯文が追刻されていた。朝鮮式沢から国産古式沢への推移を示しているであろう。岡本沢型(図版1-2)は最小の完形形で墳墓や住居跡の群集する遺跡での単独出土である。片麻岩を使用した無文・無蓋で、舞の中央に一孔を設けているなど朝鮮式小銅沢と共通しているところが多い。調査者は中期中頃前後の焼土や住居跡との関係に注目されており、大谷沢型より古く位置づけようとしている。安永田沢型(図版1-4~7)はこれまで5個の石型片が発見されており、本格的な外縁付鉏式横帯文銅沢である。横田沢(広島)、木橋沢(島根)などに近似した邪視文沢の系統である。石材は青森山系産の花崗岩の一種と鑑定された。中期後半〜末頃の住居跡から発見された。赤穂・浦石型(図版1-3)は住居跡上の包合層から発見されたもので、安永田

沢型と同系列に属する銅沢の石型である。中期末頃かと推定される。

以上九州地方で発見された銅沢およびその銅型の増加によって、近畿地方とも対比しうる横帯文銅沢の生産が中期後半に行われていたことが明らかにされてきた。また一方では岡本沢型や大谷沢型のような朝鮮式小銅沢の形態を継承した無文小銅沢の生産も行われており、その開始は中期中頃を上限として、横帯文銅沢とも並行するにいたっていることが明らかになってきた。さらに別府沢にみられるような朝鮮式小銅沢の初例も発見されるにいたり、おそらく中期中頃までにわが国にもたらされたものが終末期にまで伝世しながら祭祀の用果していたと考えられたのである。したがって北部九州においては、中期中頃〜末期の期間に①朝鮮式小銅沢の輸入→②その模倣生産→③横帯文銅沢の生産という推移があったことが明らかにされてきた。そうして②から③への推移のなかで銅型石材も朝鮮と同系の片麻岩材から花崗岩、砂岩へと推移している。しかし近畿地方にみるような養羅鉏式有文沢や流水文銅沢の発見はまだない。

多武尾沢は最小の銅沢であるが、また無文、無蓋で朝鮮式小銅沢の系列に属する。大南沢などに比べれば銅質もよい。本銅沢の最も特色ある点は舞の中央にやや大きな一孔を有することである。一般の国産銅沢では舞の短軸上に二孔があり、沢身の上面と裾に各々一對の型持孔がみられるので、このような形はきわめて注意を引き、発見時には後期終末の土器を伴発するところから銅沢の最終末に位置づけられる変型された残存形態かと思われた。しかしながら、別府沢や岡本沢型など中期を下らない頃に生産された小銅沢や石型には舞の中央に一孔を設けている点が注目されてくる。さらに近年佐賀県下で発見された沢形土製品(土製沢)は中期後半に比定されるものであるが、舞の双孔が短軸上にあるもの(図版2-13・14)と、長軸上にあるもの(図版2-15)があつてまだ定型化していない。また近時発見された東大阪市鬼塚川遺跡の畿内第Ⅲ層式土器段階以前に比定される土製沢では舞の短軸上に三孔を並列させている。さらに国外に目を転ずれば北朝鮮の雲城里(黄海南道)、「夫租蔵君墓」(平安南道貞伯里)などの小銅沢で舞の中央に一孔を有するものを見出すことができる。したがって当初わが国に輸入された朝鮮式小銅沢(別府沢)や最初に模倣生産した小銅沢(岡本沢型)にこの特徴をみることができるとはきわめて示唆的である。すなわち多武尾沢は中期後半にさかのぼって北部九州の地で生産されたであろうと推測される可能性が大きい。それが別府沢と同じように集落内祭祀に使用されて弥生時代の終焉という歴史的背景のもとに廃棄されたものであったと思われる。近時大野川流域で発見例の多い鏡片廃棄の現象と同じ内容を示しているであろう。

舞孔が短軸上に双孔をすえる製作法は横帯文銅沢の出現とともに次第に定型化していったものであろう。

多武尾沢は北部九州で青銅器の鋳造が開始された第1段階の作品であり、剣、矛、戈などの武器形祭器も銅沢形祭器もまず朝鮮系遺物の模倣から始まっている点で規を一にしていたのである。その時期は西暦1世紀前半に比定することができよう。(1982-8-27稿)

図版2九州発見銅鉞(8・9・12)土製鉞(13・15)および朝鮮発見小銅鉞(10・11)

4～7 鳥栖市安永田石甕(佐賀)

図版1九州発見銅鉞鑄型



図版1 多武尾遺跡と周辺の航空写真



第1次調査区
南西方向より
SD-1, SD-4
SD-2, SD-3
SD-6を望む。



第1次調査区
南西方向より
SD-3, SD-6を
望む。



第1次調査区
北東方向より
SH-1を望む。



第2次調査区
東方向より全景



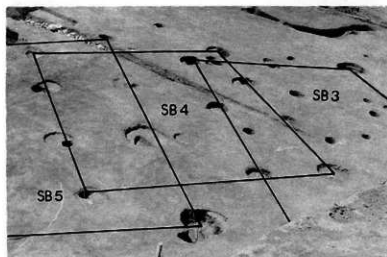
第2次調査区
東南方向より全景



SH-3北方向より



SH-1
北東方向より



SB-3, SB-4, SB-5
南東方向より



SK-1
西方向より

図版 4



SD-6
北方向より

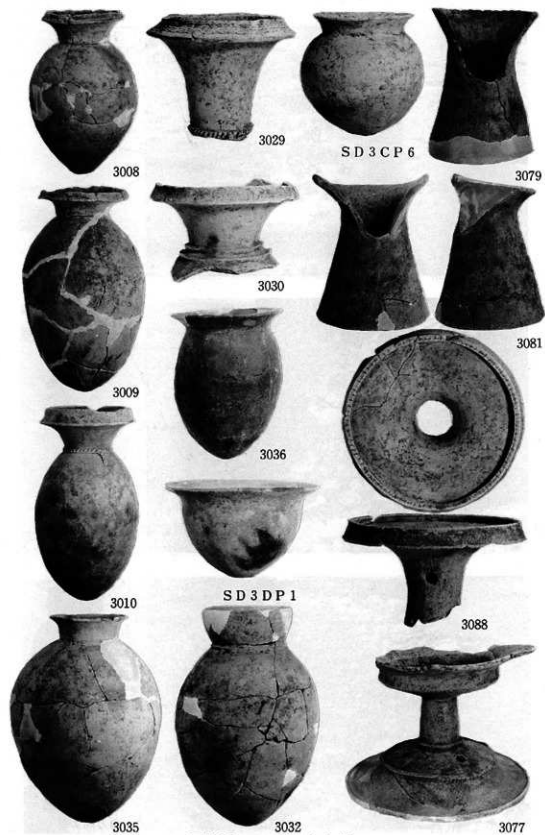


SD-6E 8区
土器出土状態
北方向より

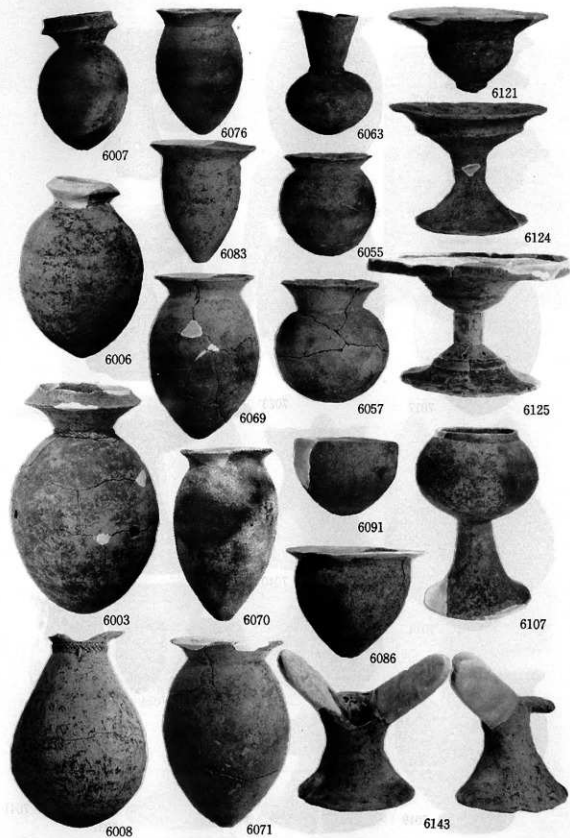


SD-7 I 9区
土器出土状態
西方向より

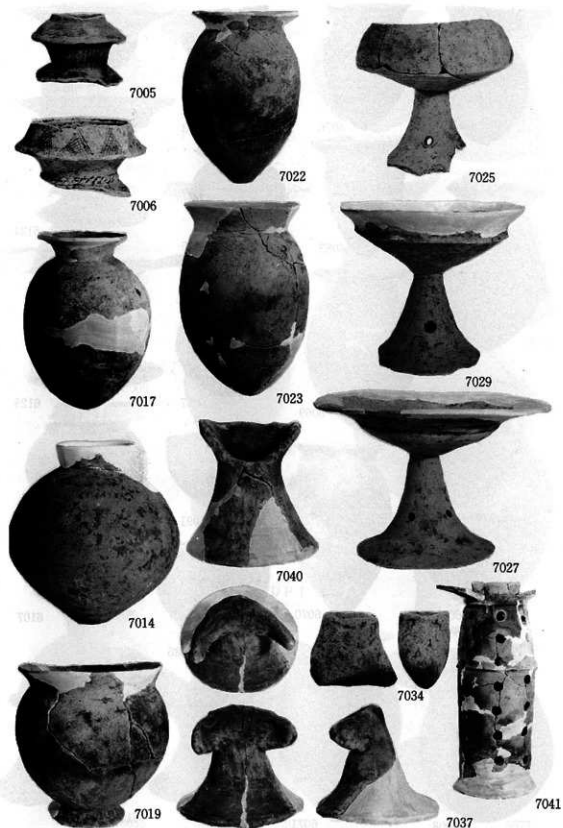
図版 5



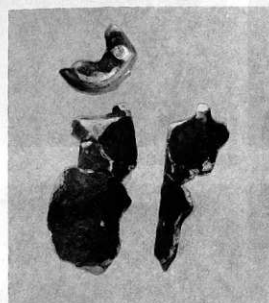
圖版6 S D3出土土器



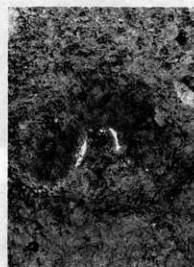
圖版7 S D6出土土器



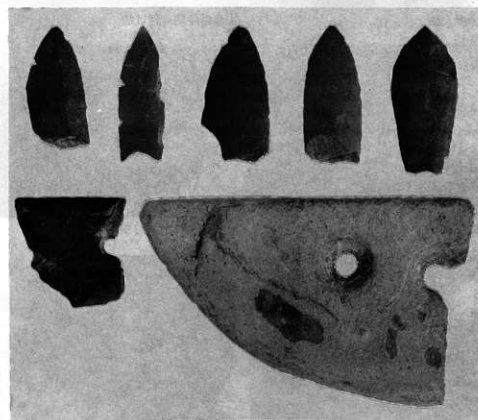
図版8 SD 7 出土土器



小銅鐸(縮尺1/1)

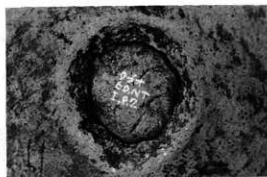


小銅鐸出土状態



磨製石鏃・磨製石庖丁(縮尺1/1)

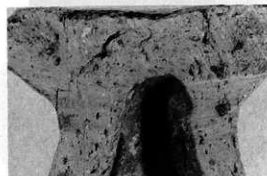
図版9 小銅鐸及び磨製石鏃・磨製石庖丁



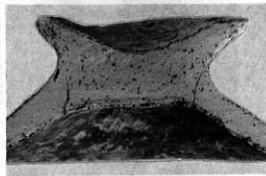
①高杯6125円壁充填法



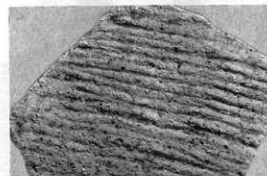
②高杯3065突起充填法



③高杯挿入法



④台付鉢貼り付け法



⑤調整タキ痕



⑥調整ヘラケズリ痕



⑦布目痕



⑧靱痕7035

図版10 接合法及び調整・布目・靱痕 ※番号は土器通し番号と同じ

多武尾遺跡調査概報

昭和57年12月

発行 大分市教育委員会
〒870 大分市荷揚町2番31号

印刷 (有) 三重野印刷社
大分市岩田町2丁目